

2023 年度卒業論文

手のひらに多くの汗をかきやすい人々の語り
—発汗の社会学的考察—

20SG1114 高松あやめ

凡例

「 」を付けた箇所は、インタビューの逐語録あるいは、文献等からの直接引用を示す。

〈 〉を付けた箇所は、強調を示す。

[]を付けた箇所は、筆者注を示す。

()を付けた箇所は、文献注を示す。

目 次

目次	ii
序章	1
第1章 スティグマとしての多量な手汗	3
第1節 スティグマとは何か	3
第2節 様々なスティグマ	3
第1項 顔に大きなあざや傷跡のある人々	4
第2項 ロキタンスキー症候群の人々	4
第3項 痙攣性発声障害の人々	5
第4項 手のひらに多くの汗をかきやすい人々	6
第5項 スティグマの比較と考察	6
第2章 多量な手汗の医療化	8
第1節 医療化とは何か	8
第2節 手掌多汗症	9
第1項 多汗症の診療	9
第2項 多汗症患者の割合	10
第3項 手掌多汗症の治療	11
第4項 腋窩多汗症の当事者へのアンケート調査	12
第3章 手に汗をかきやすい人についてのアンケート調査	
—インタビュー調査の予備調査として	13
第1節 アンケート調査の概要	13
第1項 アンケート調査の目的	13
第2項 アンケート調査の方法	14
第2節 アンケート調査の結果と考察	14

第4章 手汗が気になった経験のある人へのインタビュー調査	15
第1節 インタビュー調査の概要	15
第1項 インタビュー調査の目的	15
第2項 インタビュー調査の方法	16
第2節 調査協力者のプロフィール	17
第5章 インタビュー調査の結果と考察	25
第1節 手汗をかきやすいことが気になった時	25
第1項 気になり始めたきっかけ	25
第2項 触れた物に汗がつく—勉強・楽器・スポーツ	28
第3項 触れた手に汗がつく—握手・手を繋ぐ・ハイタッチ	30
第4項 誰かと一緒にいる時の方が、気になる	32
第2節 手汗の秘匿と告知	36
第1項 秘匿〔誰に・いつ・どのように隠したか〕	36
第2項 告知〔誰に・いつ・どのように伝えたか〕	38
第3項 家族の反応	39
第3節 治療経験とそれに対する考え	41
第1項 治療をした／しなかった理由と、今後したいと思うか	41
第2項 実際の治療を経て抱いた思い	45
第4節 手汗をかきやすいことに悩んだ／悩まなかった時期	46
終章	48
注	51
謝辞	53
参考文献	53
巻末資料	56

序章

汗をかくのは人間の生理現象である。しかし多量の発汗はときに、その本人に羞恥心や不快感をもたらす。多くの汗をかく状態は多汗症と診断され、治療の対象にもなる。厚生労働省によると、日本人の7人に1人が多汗による生活への支障を訴えており(1)、多汗の悩みを抱える人々は決して少なくない。

幼少期から汗っかきだった私は10代の頃に皮膚科で手掌多汗症の診断を受けた。手掌多汗症とは、手のひらに多くの汗〔以下、^{てあせ}手汗と表記する〕をかきやすいことによって、日常生活に支障をきたす状態のことである。私は手汗によってノートがふやけて字が書けないといった不便さや、物事が上手くいかないことを手汗のせいにしてしまう自分への苛立ちといった気持ちの面での葛藤を経験した。そうした中で、手に多くの汗をかきやすいことは命にかかわる病気ではないが、日常生活の様々な場面で当事者の生活や価値観に影響を与えうるものだと考えるようになった。

また、治療の対象としての手汗にも興味が湧いた。私が皮膚科で診察後にもらった内服薬には、のどが渇いて声が出づらくなるという副作用があった。私には薬の効果があまり感じられなかったことや、副作用によって所属していた合唱部の活動に支障が出たことから、薬の服用を途中で辞めることにした。この経験から、医療が多量な手汗の悩みを解消する一つの選択肢となった今、当事者が治療を選択した／しなかった理由や、治療経験が当事者に与える影響について気になり、それを調べたいと思った。

さらに、人の発汗が社会的にいかんにか位置づけられているのかについても気になった。社会の発汗へのイメージは良いものもあれば悪いものもあると思ったからである。例えば「いい汗、かいてこう！」というテーマで特集が組まれた『kiitos.』(2)の記事では、発汗を「体温調節システム」「心と身体の映し鏡」「美容と健康のバロメーター」と肯定的に扱っていた(3)。スポーツやサウナで「いい汗をかく」という肯定的な言い回しもよく耳にする。一方で、制汗剤などを扱う企業である花王のホームページでは「ネガティブな汗」を略して「ネガ汗」と呼び、その例として他人と接している時に気になる汗やニオイを挙げている(4)。また同企業の消費者実態調査の結果として、人々が「ネガ汗」をマナーとしてケアする意識が高いことを紹介していた(5)。つまり発汗は、当事者の関心事や置かれている環境によって異なる意味を持つといえる。私はこれらを社会学的により詳細に分析し、考察したいと考えた。

以上から本稿では3つの問いを中心に考察していく。1つ目は〈手に多くの汗をかきやすいことは、当事者の生活や価値観にどのような影響を与えるのか〉。2つ目は〈多量な手汗の治療に関する経験は、当事者にどのような影響を与えるのか〉。ここでは治療した／しなかった背景も含めて治療に関する経験とする。3つ目は〈現代社会において、多量な手汗やその他の身体部位からの発汗にはどのような意味が付与されているのか〉である。そのために文献調査に加えて、手汗が気になった経験のある当事者へのインタビュー調査を実施した。

本稿では手に多くの汗をかきやすい当事者の思いや困りごとに目を向けることによって、手汗を〈たかが汗〉ではなく、それが〈生きづらさ〉の一つとなるという見方を示す。また手汗の医療化についての考察から、医療が個人および社会にもたらす影響を改めて考える。つまり本稿は、発汗という症状から現代社会を描き、見つめ直す意義があると考える。

第1章ではアーヴィング・ゴッフマンのスティグマ論を用いて、手に多くの汗をかくことがスティグマと捉えられることを論じる。第1節でスティグマとは何かを述べ、第2節で手に多くの汗をかく人々が経験する生きづらさを他の生きづらさと比較しながら、手に多くの汗をかくことがスティグマ化されていることを述べる。第2章では多量な手汗の医療化について論じる。第1節では医療化とは何かを述べ、第2節では手に多くの汗をかく状態が手掌多汗症と呼ばれ、医学的治療の対象になったことについて検討する。第1項では多汗症の分類・診断方法、第2項では日本における多汗症患者の割合、第3項では手掌多汗症の治療方法を述べ、第4項では先行研究である腋窩〔わき〕多汗症患者へのアンケート調査結果について考察する。第3章では、インタビュー調査の予備調査として実施したアンケート調査の概要と結果を示す。第4章では、手汗が気になった経験のある人と、手掌多汗症の診断・治療経験がある人を対象としたインタビュー調査の目的、方法、協力者のプロフィールをまとめる。第5章では、インタビュー調査の結果を示しながら考察する。終章ではここまでの章で検討し考察した結果を踏まえて、序章で述べた本稿の目的とした3つの問いに対する答えを考察したのち、本稿の結論を述べる。加えて本稿の限界や課題を述べる。

第1章 スティグマとしての多量な手汗

第1節 スティグマとは何か

この章では、手に多くの汗をかくことを社会的に分析する端緒としてスティグマ論を検討する。

アーヴィング・ゴッフマンによると、ある属性は文脈によって信頼を失うものにも信頼を得るものにもなり、スティグマの議論で重要視すべきことは、望まれない属性そのものではなく、その属性を望ましくないものとしてスティグマ化させる関係性である（ゴッフマン 2016: 16）。つまり、ある身体的特徴は、環境や状況によって望ましいものにも望ましくないものにもなり、その特徴を望ましくないものとしてスティグマ化させる関係性が存在するとき、生きづらさとしてあらわれるのだといえる。

発汗が当事者の関心事や置かれている環境によって異なる意味を持つことを踏まえ、また、手に多くの汗をかくことが生きづらさにつながるとするなら、手に多くの汗をかく状態も身体的特徴に関わるスティグマの一つとして捉えることができるだろう。

第2節 様々なスティグマ

本節では、手に多くの汗をかく人々が経験する生きづらさを、他の身体的特徴に関わる生きづらさと比較しながら、手に多くの汗をかくことがスティグマ化されていることを述べる。そのためにまず、身体的特徴に関わる生きづらさを二つの指標で分類する。その指標は、可視性と、生活における困難である。ゴッフマンは可視性について、「ある人がスティグマをもっていることを〔他人に〕告知する手がかりがスティグマそのものにどの程度備わっているか」（ゴッフマン 2016: 88）だと述べている。スティグマは他人の視覚以外に、聴覚や触覚からも明らかになり得るが、本稿では聴覚や触覚により明らかになる場合でも可視性と表す。よって本稿における可視性は〈他人が目で見、または本人と接しやすさにはっきりとその身体的特徴を認識できるかどうか・その程度〉とする。生活における困難とは、症状そのものが生活する上で障害となるかどうか、また自己嫌悪などの精神的な困難さがあるかどうかを比較するための指標とする。

二つの指標を軸に、手に多くの汗をかく状態と、他の身体的特徴に関わる生きづらさを比較していく。比較対象は次の人々、〈顔に大きなあざや傷跡のある人々〉〈ロキタンスキー症候群の人々〉〈痙攣性発声障害の人々〉である。

第1項 顔に大きなあざや傷跡のある人々

顔に赤あざを持つジャーナリストの石井政之は、顔にあざや傷跡のある人々を「障害者でもなく健常者でもない存在」という意味で「異形の人」と呼んでいる（石井 2000: 402）。西倉実季は、疾患や外傷によって、顔にひじょうに目につきやすい特徴をもつ「異形の人々」が直面する心理的困難について、不安感や羞恥心などの否定的感情、自尊感情への悪影響、対面的相互行為の困難を挙げている（西倉 2008: 37）。西倉がインタビューをした当事者の一人は、恋愛や就職が困難であることや、人の視線にさらされる辛さを経験したが、メイクであざを隠すことによって対処した。しかし彼女が新たに問題経験として語ったのは、スティグマ露見への不安それ自体ではなく、親密な関係を回避せざるをえないという苦勞であった。彼女は新たな苦勞への対処として、見知らぬ一般的な他者との関係においては隠す傷を、具体的な他者との関係のなかで開示し、それに対する関心や配慮を求めた。開示をした友人の何人かは「かわりに〔あざに〕負けないくらいの自分の悩みを打ち明けてくれた」と彼女が語ったことから、西倉は、スティグマを隠すことによって一度は失うことになった親密な人間関係が、きわめて限られた範囲ではあるが、新たに生成していることを指摘した（西倉 2008）。スティグマを隠して過ごすことを、ゴッフマンはパッシングと呼んだ（ゴッフマン 2016）が、西倉はパッシング以降の苦しみを視野に入れることの重要性を述べたのだ（西倉 2008: 46）。

第2項 ロキタンスキー症候群の人々

田中岐佳は、生まれつき子宮や膣の無形成や形成不全といった女性器の奇形がみられる、ロキタンスキー症候群の人々へのインタビュー調査を行い、女性が出産するべきという社会的規範の中で当事者がどう考え、どう行動するのかについて検討した（田中 2022）。田中はインタビュー結果として、当事者は子宮が無いという事実を「女性としてのアイデンティティが無い」こととして捉え、出産できないことを悲観的に考えていたこと、当事者が子宮移植・代理懐胎・養子縁組制度を心から望んでいる様には思えないことを示した（田中 2022）。また、メディアが「子宮移植はロキタンスキー症候群の当事者にとっての希望である」と捉えられるような報道をすることに触れ、子どもを持つ選択肢が登場することで当事者の抱える問題や感情の全てが解決できると考えることの危険性を指摘し、当事者が本当に求めていることをよく検討することの必要性を述べた（田中

2022)。そして「出産する当たり前さ」はロキタンスキー症候群の女性だけでなく、様々な理由で出産をしない女性たちを苦しめると述べ、どんな選択肢も尊重されるような社会になれば、女性たちはより生きやすくなるのではないかと述べた（田中 2022）。〈女性は出産するのが当たり前である〉という社会的規範のある社会において、〈出産できない女性〉であることはスティグマとなり、当事者を生きづらくする。また、医療技術が女性の出産の選択肢を広げる希望として解釈され得ることから、医療はそれが使われる社会の規範と深く関わり合っていることが分かる。

第3項 痙攣性発声障害の人々

野島那津子は、「論争中の病」の一つとして痙攣性発声障害を取り上げ、当事者へのインタビューを行った（野島 2021）。「論争中の病」は、医学的に認められていない病のことを言い、具体的には腰痛やストレス、軽い落ち込みなどの比較的曖昧な状態から、化学物質過敏症など比較的整理された概念で呼ばれるものがある（野島 2021: 3）。これらは多くの場合、病者の訴える症状以外に明白な証拠がない。そのため、病気の実在性をめぐって、医療専門家と患者・医療専門家同士・患者をめぐる周囲の人々や世論も加わって「論争」が生じているのだ（野島 2021）。痙攣性発声障害は、発話中に声の詰まりや途切れなどの症状を呈する発声障害である（村野・石毛 2005）。喉頭に器質的な病変がなく正確な診断が難しいことや、まれな疾患とされていることから、現時点で疾患としての地位が医学／医療的にも社会的にも確立されていない（野島 2021）。

野島は痙攣性発声障害に「二重の困難」があることを指摘した（野島 2021: 69）。①症状そのものに起因する困難と、②病気だと認識されないことに起因する困難である。①は、声が詰まることなどの症状が原因となって、喉の痛み、疲労、自己評価の低下等を誘発する困難だが、パッシングによってある程度縮減される。②は、病気について他者に説明することが難しいこと、原因について周囲から「風邪」「緊張」「精神的なもの」と当事者が意図しない意味付けを与えられること、嘲笑や侮蔑といった否定的反応を受けることなどであり、②の困難の縮減は相互行為だけでは難しいという（野島 2021: 70）。身体の異変に対して医療が診断・治療をすることが自明視される現代社会において、医者や周囲から〈病気〉だと認識されない状態はスティグマといえる。

第4項 手のひらに多くの汗をかきやすい人々

本間洗貴は、手のひらと足の裏に、人よりも多くの汗をかき苦勞について、発汗時はタオル等で拭いてもすぐにサウナに入っているような汗の量になる、電子機器が水没する、文字を書いている紙が破ける、勉強に集中できないなどを挙げている（本間 2019）。他者と関わる場面においても、隣の人に渡すプリントや物が濡れてしまう、友達に驚かれる、人と手を繋ぐことが怖い、といった支障もある(6)。このような経験が積み重なると、当事者は手汗への否定的な感情を募らせ、手汗を望ましくないスティグマとして認識することがあると考えられる。たとえ他者から多量な手汗についての悪口を言われたことがなくても、多量な手汗によって生産性や集中力が下がる状況や、他の人と〈違う〉自分自身に嫌悪感を抱くこともあるのではないだろうか。

また発汗は程度の差はありつつも、ほとんどの人間が経験する状態であるため、手汗をかき苦しみが理解されづらく、周りに軽くあしらわれやすい。実際本間も多汗症について「死ぬ病気ではないからいいじゃないか」「ただの汗かき」と言われた経験を挙げている（本間 2019）。周囲の無関心や楽観的な解釈が、当事者にとっての悩みとなる場合があるのだ。このような周囲の態度は、多量な手汗が医療化する事によって変化するかもしれない。痙攣性発声障害の人々が、自分が病気であると認められようと積極的に医療の言葉で自分を表現しようとする傾向がある（野島 2021）ように、手に多くの汗をかき人々が周囲の態度を変えようとするとき、手汗が医学的治療の対象であることを積極的に語ることもあると考えられる。

以上から、手に多くの汗をかきやすいことが〈触れた物が汗で濡れる支障〉〈触れた相手に不快感を与えるのではないかという不安〉〈周囲の無関心と楽観的解釈による苦勞〉といった生きづらさにつながるということが分かり、手に多くの汗をかき状態が身体的特徴に関わるスティグマの一つとして捉えることができるといえる。

第5項 スティグマの比較と考察

4つのスティグマを可視性と生活における困難という観点から整理したものが、表1である。

表1 スティグマの分類

スティグマの種類	可視性	生活における困難
顔の大きなあざや傷跡	○ 主に視覚から 〔メイクで隠すことができる場合がある〕	恋愛や就職が困難 人の視線にさらされる辛さ 親密な関係の回避
ロキタンスキー症候群	×	妊娠・出産ができないこと 女性としてのアイデンティティの喪失
痙攣性発声障害	△ 主に聴覚から	喉の痛み・疲労 病気だと認識されないこと
多量な手汗（手掌多汗症）	△ 主に触覚から	触れた物が汗で濡れる 触れた相手に不快感を与えるのではないかという不安 周囲の無関心・楽観的解釈と本人の意識との差

(出典) 筆者作成

顔の大きなあざや傷跡は、他人が目で見るとすぐにはっきりとその属性を認識できるため可視性は大きいといえる。メイクなどであざや傷跡を隠すことは可能だが、自分の素顔を誰に、どのように見せる／見せないかという問題や、素顔がばれることへの不安などが生じる。ロキタンスキー症候群であることは、相手が目で見、本人と接してすぐにはっきりと認識することはできないため可視性はない。ただ親密な関係にあるパートナーにのみ病気の存在が明らかになる場合が多く、西倉の言う「親密な関係を回避せざるをえない」(西倉 2008: 46) 状況と類似している。痙攣性発声障害であることは、他人が目で見ても分からないが、本人と会話をすることで明らかになる。相手に病気だと認識されないことにより、周囲の否定的反応や見当違いの解釈をされるという困難がある。多量な手汗が明らかになる場面は、他人と手が触れる時や、濡れた手を見られた時だろう。初対面の人にすぐに多量な手汗が明らかになるということは考えにくい、自分が親密になりたいと思っている友人や恋人などに明らかになりやすい。これは「親密な関係を回避せざるをえない」(西倉 2008: 46)、顔に大きなあざや傷跡のある人々やロキタンスキー症候群の人々の経験と類似する。また、周囲の無関心や楽観的解釈への困難は、痙攣性発声障害の

人々の、相手に病気だと認識されないことによる困難と類似する。

第2章 多量な手汗の医療化

第1節 医療化とは何か

イヴァン・イリッチは、以前は医学的に定義されていなかった多くの問題が、医療の範囲内に置かれることを「生活の医療化」と呼んだ（イリッチ 1979）。P・コンラッドとJ・W シュナイダーは、様々な逸脱行動や状態に対して医療的解決が探されていることを「逸脱の医療化」と呼んだ。例として、飲酒をしてばか騒ぎをする傾向のある人がアルコール依存症として病院で治療されることや、暴力の暴発を起こす傾向のある青年に対して精神外科的手術を行うことなどを挙げ、逸脱が悪しきものから病めるものへと変化したことを指摘した（コンラッド・シュナイダー 2003: 55）。ここで医療化という言葉は、ある行動・状態を「医学的な問題として、通常は病いとして、定義シラベル化すること、そしてそれに対するある形態の治療を提供することを医療専門職に委任すること」（コンラッド・シュナイダー 2003: 55）として使われており、本稿においてもこの意味で用いる。

医療化には様々な側面がある。イリッチは、社会が〈誰が病気であるか・病人に対して何をするかを決定する権利〉を医療に譲渡したことを指摘し、医療を社会統制の手段としてみなし批判的に論じた（イリッチ 1979: 14）。そのような社会において、「定義され診断された不健康の方が他のいかなるレッテル、あるいはレッテルなしよりも遙かに望ましいという信仰が有力である。それは犯罪的あるいは政治的異常よりもましであるし、怠惰よりもましであるし、自分の意思で仕事をさぼるより良いのである。」という（イリッチ 1979: 94）。そして人々は「身体的病気は社会的、政治的責任を免除してくれるという虚言をききたがる」（イリッチ 1979: 94）。ここでイリッチは、ある行動や状態が病気として医学的に説明されると、それは〈得体のしれない異常〉ではなくなり、様々な役割や責任が免除される正当な理由として作用することを示しているといえるだろう。また Zola は、「特定の行動を病気として受け入れ、病気を望ましくない状態として定義することによって、論点は特定の問題に対処するかどうかではなくなり、いつどのように対処するかになる」と述べた（Zola 1975: 86）〔引用は筆者の仮訳による〕。ある行動や状態が病気として

定義されると、〈なぜその行動や状態が好ましくないのか〉〈本当に治療すべきなのか〉は語られなくなる。

P・コンラッドらも、逸脱が医療化することによって、問題行動が個人化・脱政治化されることを批判的に論じた。問題行動や状態を個人的な症状・治療すべきものとしてみなすことにより、今ある社会や環境が当事者に強いていることを見落としてしまう可能性を示唆したのだ（コンラッド・シュナイダー 2003）。手に多くの汗をかくことを〈性質〉ではなく疾患としての〈症状〉として捉えると、〈手汗でノートが滲んで集中できないこと〉は〈手に汗をかく人の個人的な問題〉であり治療で解決すべきことだとみなされる。社会や環境の変化によっても手汗による支障が軽減できる可能性が見落とされ、本人の性質を変えることだけが強調されるようになる。実際、耐水ノート(7)などの社会や環境の変化に取り組む人もいる。

野島は、イリッチらの姿勢を「医療に対する批判的なトーン」と表現し、社会全体における過剰医療化の影響を批判的に論じることが、医療化研究の中心的な仕事であったと述べている（野島 2022: 6）。そして野島は「たしかに、医療は病者を抑圧する側面があることは否定できないし、個人の経験は医療の言葉だけでは語り尽くせないこともまた事実であろう。しかし、実際のところ、医療は病む人の役に立ったり、病者の経験を語りに換える資源になったりもする」と述べた（野島 2021: 7）。医療に対する過度な批判的姿勢に与することなく、医療に対してオープンな態度で、痙攣性発声障害の人々を含む「論争中の病」を抱える人々の語りを検討したのである（野島 2021: 7）。

多量な手汗の医療化には、手汗を治すべきものとしてみなす側面があり、社会や環境自体が、多量に手汗をかく当事者にとってどのようなものかを見えにくくする可能性がある。その一方で、野島の言う「病者の経験を語りに換える資源」（野島 2021: 7）として、医療の言葉が当事者にとっての心理的な救いになる可能性もある。本稿ではこの二つの側面を踏まえた上で、医療を過剰に批判・擁護していないか注意を払いつつ論じていくことにしたい。

第2節 手掌多汗症

第1項 多汗症の診療

過剰な発汗が病気として診断され、治療対象になるにあたっての議論は、主に日本皮膚科学会や日本発汗学会などによってなされてきた。2010年に原発性頭部顔面多汗症を除く

原発性局所多汗症の診療ガイドラインが作成され、重症度に応じた治療が行われるようになった（藤本・横関他 2015）。2015年には、原発性頭部顔面多汗症の診療ガイドラインが追加され新たに改定された。この改定には、多汗症治療のための過剰医療〔交感神経遮断術など〕の弊害についての見解や、多汗症による労働意欲の低下などといった勤労労働者における社会的ニーズに広く対応する目的があった（藤本・横関他 2015）。2023年には、2020年に抗コリン外用薬が保険適応となったことを受けて改定された（藤本・横関他 2023）。

ガイドラインには多汗症の分類が示されている。多汗症は、全身の発汗が増加する全身性多汗症と、体の一部に限局して発汗量が増加する局所性多汗症に分類され、さらにそれぞれが、特に原因のない原発性〔特発性〕と、他の疾患に合併して起きる続発性のものに分けられる（藤本・横関他 2015）。続発性多汗症の原因は、結核などの感染症や神経疾患、脳梗塞、薬剤作用、脊髄損傷による自律神経障害などがある（藤本・横関他 2015）。頭部・顔面、手掌、足底、腋窩に、温熱や精神的負荷の有無いかんに関わらず、日常生活に支障をきたす程の発汗が生じる状態を、原発性局所多汗症と定義する（藤本・横関他 2015）。今回の論文では主に、原発性の手掌多汗症について考察する。

ガイドラインで原発性局所多汗症の診断基準とされている指標は Hornberger(8)の指標で、局所的に過剰な発汗が明らかな原因がないまま6カ月以上認められ、以下の6症状うち2項目以上あてはまる場合、原発性局所多汗症と診断される（藤本・横関他 2015）。

1) 最初に症状がでたのが25歳以下であること 2) 対称性に発汗がみられること 3) 睡眠中は発汗が止まっていること 4) 1週間に1回以上多汗のエピソードがあること 5) 家族歴がみられること 6) それらによって日常生活に支障をきたすこと(9)である。また Struttonらが示した多汗症患者の重症度尺度〔HDSS〕(10)によると、症状の重症度は患者の自覚症状により以下の4つに分けられる。「1) 発汗は全く気にならず、日常生活に全く支障がない。2) 発汗は許容でき、日常生活に時々支障がある 3) 発汗はほとんど許容できず、日常生活に頻繁に支障がある 4) 発汗は許容できず日常生活に常に支障がある」（Strutton・Kowalski 他 2004: 243）〔引用は筆者の仮訳による〕である。3) または 4) を重症と定義する（藤本・横関他 2015）。

第2項 多汗症患者の割合

多汗症患者について、2009年の厚生労働省の調査によると、原因不明の手と足の多汗症

のうち、重症原発性^{しょうせき}掌蹠多汗症患者(11)は、日本国民の 0.64% [80.12 万人] 近くを占めるという(12)。また多汗症患者には、驚異的な労働生産性の低下 [48%] が認められ、多汗症による経済損失試算が月に 1970 億円であるという報告もされた(13)。

2013 年に行われた調査において、5807 人の回答者のうち原発性局所多汗症であるとされたのは(14)12.8%、有病率と平均発症年齢は、腋窩で 5.75%・発症年齢 19.5 歳、手掌で 5.33%・発症年齢 13.8 歳、頭部で 4.7%・発症年齢 21.2 歳、足底で 2.79%・発症年齢 15.9 歳であった(藤本・横関他 2023)。原発性局所多汗症であるとされた人の医療機関への受診率は 6.3%であり、原発性局所多汗症であるとされた人の 47.8%が制汗作用のないデオドラント剤を使用していることが分かったことから、患者への疾患啓発や適切な治療を提供するシステムの策定が必要だと結論付けられている(藤本・横関他 2023)。2020 年の調査では 60,969 人を対象とした web 上でのアンケート調査が実施され、原発性局所多汗症の有病率が 10.0%、それぞれの部位別に計算された有病率は、腋窩 5.9%、頭部・顔面 3.6%、手掌 2.9%、足底 2.3%であり、年代別の有病率は手掌では 15~29 歳がピークであることが分かった(Fujimoto T・Inose Y 他 2022) [引用は筆者の仮訳による]。2013 年と 2020 年の調査結果は、調査人数や回答者の年齢分布に違いがあり単純に比較はできないが、社会的な活動範囲が広く、生産性のある年代の罹患率が高い(15)。ただ、若い年代だからこそ手のひらに多くの汗をかくことが気になり、症状を訴えやすいとも言える。また、多汗症を自覚し始める時期と思春期が重なることから、思春期においては自分が多汗症であることに悩んだ際に周りに相談するのを拒む場合や、相談しても親や友達の理解が得られず「ただの汗っかき」「病院に行くほどではない」と言われ相手にされない場合が考えられる。

第 3 項 手掌多汗症の治療

池袋西口ふくろう皮膚科クリニックの藤本智子院長は、日本テレビ報道局の取材に対して「[原発性局所多汗症は] 原因が分かっていない疾患なので、原因についての根本的な治療はなく、基本的には対症療法というもので、困っている部位の汗に対してそれぞれ治療をしていく。」と述べている(16)。野津原広中によると、原発性局所多汗症の治療法には主に、塩化アルミニウムを含む塗り薬・電流を流した水に患部を浸すイオントフォーシス・脇や手足へのボツリヌス菌毒素の注射・抗コリン薬の内服・胸腔鏡下胸部交感神経遮断術 [ETS] [発汗に関わる交感神経の一部を焼くなどする手術] があるが、効果には個

人差がある（野津原 2020）。このうち保険適用となるのは、イオントフォレーシス・抗コリン薬・ETS である（藤本・横関他 2023）。塗り薬の副作用として痒みや灼熱感、ポツリヌス菌毒素注射の有害事象としては注射時の痛みや、稀だが手の筋力低下が報告されている。また内服薬には口内やのどが渇くなどの副作用の可能性もある（藤本・横関他 2023）。

ETS で遮断された交感神経は元に戻すことはできず、手術の副作用として背中や尻など別の部位から多量の汗が出る代償性発汗も多くみられる（野津原 2020）。そのため ETS は患者に代償性発汗に対しての十分なインフォームドコンセントを得た上で行うべき治療として原発性局所多汗症診療ガイドラインに明記されている(17)（藤本・横関他 2023）。ETS の術後アンケート(18)を行った野中誠らによると、術後の手掌多汗の完全停止は 60%、微量発汗は 33%であり、代償性発汗がみられたのは 93%、そのうち「激しくて困る」との回答が 33%、「激しいが我慢できる」との回答が 67%であったという。また QOL の改善を 80%で認め、「手術を受けなければよかった」とする症例はなかったが、「代償性発汗に終始悩まされている」と回答するものもあった（野中・門倉他 2000）。このアンケート回答者は 15 名であり多いとは言えないが、代償性発汗の可能性はかなり高いといえるだろう。神経を切る ETS は、元に戻すことのできない不可逆的な手術である。また多くの発症者が報告されている 10 代 20 代の人々にとって、手術そのものに対する抵抗感や不安は大きいと考えられる。

第 4 項 腋窩多汗症の当事者へのアンケート調査

藤本智子らは、2022 年に腋窩多汗症の患者に対してインターネットアンケート調査を行っている。この調査は、患者の疾患の認知度や病院受診意欲、日常生活への影響を把握する目的で行われ、重症の腋窩多汗症患者に該当し得る調査対象者 608 人(19)が対象となった（藤本・大勝他 2022）。その結果、多汗症という疾患名を「聞いたことがある」92.3%、腋窩の多汗症状により「学業・仕事へ影響があった」17.1%、この内訳としては「希望の職種・職業を諦めた経験がある」6.6%が最も多い数値だった（藤本・大勝他 2022）。また腋窩多汗症に対する対処法として「医療機関を受診した」が 9.5%あった。医療機関を受診したことのない調査対象者のうち「医療機関で腋窩多汗症の治療が可能であることを知っている」58.9%、「医療機関で腋窩多汗症の治療をしたい」64.0%であった（藤本・大勝他 2022）。藤本らは今後の展望として、患者の人生にも深刻な影響を及ぼし

うる腋窩多汗症の積極的な治療介入が必要にも関わらず、患者の受診機会は十分といえないため、多汗症の治療選択肢を提供できる医療機関の普及と患者への疾患啓発が必要と述べている（藤本・大勝他 2022）。また腋窩多汗症が気になりだした年齢は中学生が一番多く 21.9%、高校生が 18.4%、20～29 歳が 17.3%と続く結果となっている（藤本・大勝他 2022）。

本章では、多量な発汗が〈多汗症〉と名付けられ医療化したことについて述べた。医療化は多汗の治療を発展させ、〈多量な発汗は病気である〉という言葉、すなわち野島の言う「病者の経験を語りに換える資源」（野島 2021: 7）を当事者に与えた。ただ同時に、今ある社会や環境が多量に汗をかく人に強いていることは何か、どのような気持ちにしているのか〔何も感じていない当事者もいるだろう〕を見えづらくしているとも考えられる。

第 3 章 手に汗をかきやすい人についてのアンケート調査—インタビュー調査の予備調査として

前章において考察したように、手に多くの汗をかくことに関する経験は当事者によって様々である。手に多くの汗をかくことに辛さがあるとすれば、どのようなものなのか。なぜ辛いのか／辛くないのか。どのように対処しているか、対処したいと思うかどうか。対処するとしたらその方法は医療がよいか、それとも別の方法がよいか。それらを当事者への調査から考察することによって、手に多くの汗をかくという経験そのものを明瞭に認識できるのではないだろうか。

そこでまず、この章ではインタビュー調査の準備として行ったアンケート調査の概要と結果を示す。

第 1 節 アンケート調査の概要

第 1 項 アンケート調査の目的

アンケート調査の目的は大きく 2 つである。手に汗をかきやすい人々の存在と意識を探ること、手汗をかきやすいと感じたことのある人を見つけてインタビュー協力依頼をすることである。

第2項 アンケート調査の方法

Google フォームでアンケートを作成し、QR コードと URL のリンクを作成した。ゼミの担当教員に了解を得て、教員が受け持つ授業の終了直後に自分のアンケートを紹介する時間をいただき、履修生に回答を募った。

第2節 アンケート調査の結果と考察

アンケート調査の単純集計結果を表とグラフで示した資料は巻末に載せた。

回答者 77 名のうち、「手のひらに汗をかきやすい」と思ったことがある人は 30 名、思ったことがない人は 38 名、「わからない」と答えた人が 9 名いた。「わからない」と答えた人が 10% ほどいた理由は、自分が汗を「かきやすい」かどうかの判断がしづらいことや、筆者の説明不足により回答が難しかったことが考えられる。

「手のひらに汗をかきやすい」と思ったことがある 30 名のうち、手汗による日常生活への支障について、「全く支障がない」と答えたのは 11 名、「時々支障がある」と答えたのは 15 名、「頻繁に支障がある」と答えたのは 3 名、「常に支障がある」と答えたのは 1 名だった。

「手のひらに汗をかきやすい」と思ったことがある 30 名のうち、手以外にも汗をかきやすい部分のある人は 20 名、ない人は 10 名いた。手以外にも汗をかきやすい部分について、自由記述欄に記入されていたのは、頭・顔・額・鼻・口周り・首・わき・背中・裏もも・足および足の裏・全身と様々だったが、特に足および足の裏〔6 名〕と、わき〔4 名〕の回答が多かった。

「手のひらに汗をかきやすい」と思ったことがある 30 名のうち、手汗の症状で医療機関を受診したことのある人は 3 名、ない人は 27 名いた。受診経験のある 3 名は、手汗によって「頻繁に支障がある」2 名と、「時々支障がある」1 名だった。

「手のひらに汗をかきやすい」と思ったことがある 30 名のうち、手汗の原因が判明している人〔他疾患の合併症としての発汗など〕は 2 名、原因不明である人は 28 名だった。原因が判明していると答えた 2 名のうち、医療機関を受診した経験があるのは 1 名だった。また、手汗の原因についての自由記述に記入されていたのは、緊張・ストレスや自律神経の失調であった。

「手のひらに汗をかきやすい」と思ったことがない 38 名と、「わからない」と答えた 9

名のうち、「手のひらに多くの汗をかく人がいること」を知っていると答えた人は37名、知らないと答えた人は9名、無回答が1名だった。知っていると答えた37名に対し、「手のひらに多くの汗をかく人がいること」を知ったきっかけについての自由記述欄を設けた。記入されていた概要は、友人や恋人が当事者〔17名〕、YouTube〔7名・このうち東海オンエアてつや(20)の名前を挙げた方3名〕、TVやWebサイトなどのメディア〔5名〕、当事者と手が触れた経験〔2名〕、多汗症という言葉聞いた〔1名〕、Instagram〔1名〕、Twitter〔1名〕、漫画〔1名〕だった。

本アンケート調査は、性別や年齢を尋ねる質問がなかったという点において不十分だった。また、主に大学の授業の履修生に対してアンケートの回答を募ったため、回答者の多くは10代や20代だと考えられる。質問内容や回答者の偏りにおいて不十分な点があったが、「手のひらに汗をかきやすい」と思ったことがある30名のうちの半数以上が、手汗によって日常生活への支障があると答えた〔時々・頻繁に・常に支障があると答えた人の合計が19名〕という結果が得られ、手のひらの汗が日常生活に影響する場面の多さが示唆された。また、「手のひらに汗をかきやすい」と思ったことがない38名と、「わからない」と答えた9名のうち、「手のひらに多くの汗をかく人がいること」を知っている人は80%を超えていた。またそのきっかけが「友達や恋人が当事者であること」だった人が約半数いた。ここから、手のひらに多くの汗をかく人の認知度の高さが示唆された。

第4章 手汗が気になった経験のある人へのインタビュー調査

この章では手汗が気になった経験のある人と手掌多汗症の診断や治療経験のある人を対象としたインタビュー調査の概要と、インタビュー協力者のプロフィールをまとめる。

第1節 インタビュー調査の概要

第1項 インタビュー調査の目的

調査で明らかにしたいことは大きく3つある。1つ目は〈手に多くの汗をかきやすいことは、当事者の生活や価値観にどのような影響を与えるのか〉についてである。手汗をかきやすいことが気になった経験や、手汗をかきやすいことに対する当事者の考えを探る。

2つ目は〈多量な手汗の治療に関する経験は、当事者にどのような影響を与えるのか〉についてである。当事者が手汗に対処する医療をどのように考えているのか、治療した／しなかった理由とその背景にある経験等も含めて考察する。3つ目は〈現代社会において、多量な手汗やその他の身体部位からの発汗にはどのような意味が付与されているのか〉について考察することである。この社会で手に多くの汗をかくということが当事者にとってどのような意味を持つのか、インタビューから探り考察する。

第2項 インタビュー調査の方法

最初に質問項目を検討し、質問票を作成した。次に、調査目的、調査方法、調査項目の概要を記載したインタビュー調査依頼状を作成した。前章で記述したアンケート調査の回答者のうち、インタビュー調査への協力を検討して連絡先を記入していただいた方に、調査依頼状をメールで送付した。また、知人から紹介していただいた方にも調査依頼状をメールで送付した。そして、インタビュー調査の目的や情報の取り扱いについて同意をいただいた5人に、インタビュー調査を実施した。それぞれの協力者に対する調査日時や場所については表2に示した。

表2 インタビュー調査日時と方法

協力者	実施方法	調査日時	調査場所・手段	調査時間
Aさん	間接面接（1対1） 半構造化インタビュー	2023年9月3日	オンライン	約70分
Bさん	直接面接（1対1） 半構造化インタビュー	2023年7月12日	大学構内	約90分
Cさん	直接面接（1対1） 半構造化インタビュー	2023年7月21日	大学構内	約80分
Dさん	間接面接（1対1） 半構造化インタビュー	2023年7月11日	オンライン	約40分
Eさん	間接面接（1対1） 半構造化インタビュー	2023年10月28日	オンライン	約70分

（出典）筆者作成

筆者1人に対して調査協力者1人での面接形式で、半構造化インタビュー調査を行った。Aさん、Dさん、EさんにはZoomを用いた間接面接をした。BさんとCさんには大学構内で直接面接をした。全員に録音の許可をいただき、インタビュー後に逐語録を作成して分析した。

第2節 調査協力者のプロフィール

調査協力者のプロフィールと調査結果を概観する。表3と表4に、調査協力者の基本属性および手汗の程度についてまとめた。

表3 調査協力者の基本属性

協力者	性別	年齢	現在通っている学校	国籍 居住地	定位家族	配偶者
Aさん	女性	20	大学 社会学	日本 関東	父〔会社員〕 母〔会社員〕 姉	なし
Bさん	女性	22	大学 社会学	日本 関東	父〔会社員〕 母〔演奏家〕 弟	なし
Cさん	女性	22	大学 社会学	日本 関東	父〔自営業〕 母〔パート〕 姉	なし
Dさん	女性	21	大学 国際関係学	日本 関東	父〔会社員〕 母〔会社員〕	なし
Eさん	男性	23	大学 医学	日本 九州	父〔会社員〕 母〔会社員〕	なし

(出典) 筆者作成

表 4 調査協力者の手汗の程度

協力者	日常生活への支障	自身の発汗に辛抱できるか	医療機関受診経験	睡眠中の手汗	手汗の対称性 量やタイミング	手以外に汗をかきやすい部位
Aさん	常に	辛抱できない	なし	なし	対称的	足・脇
Bさん	頻繁に	多少気になるが辛抱できる	あり	なし	対称的	足・脇
Cさん	時々	多少気になるが辛抱できる	あり※汗疱の治療	不明	対称的 汗疱は疲労時に左手のみ	足
Dさん	時々	多少気になるが辛抱できる	なし	不明	意識した方の手に発汗	脇
Eさん	時々	多少気になるが辛抱できる	なし	なし	対称的	足・脇

(出典) 筆者作成

Aさん、20歳の女性。手汗による日常生活への支障は常にあり、辛抱できない。医療機関への受診経験はなく、手汗の原因も不明だ。手汗は両手に対称的に出る。

物心ついたころから手に汗をかきやすい。手汗を意識したきっかけは、小学校2年生の時の出来事だ。友達がペンで指先に絵を描いていて、自分の手に描く時だけインクが滲んでしまった。友達に「滲むね」と言われたことがすごく嫌で、記憶に残っている。

それ以降も、手汗が気になった場面はたくさんある。学校生活では、紙が濡れる、文字が滲む、友達に借りたペンに汗が付いていないか気になる等、色々あった。恋愛の場面では手を繋ぐことに悩んだ。付き合うイコール手を繋ぐと言ってもよいほど、手を繋ぐ場面は恋愛の最初にあると思っていたが、誰かと付き合っても手を繋ぐことを避け続けた。過去に付き合った男性は「別に気にしないよ」と言ってくれたが、自分が気になってしまい、素直に手を繋ぐことができなかった〔今の彼氏との関係性は後述〕。日常生活において

色々な物に触る際に、手にかく汗を気にしないていることができない。自分にとって手汗はコンプレックスであり、悩みだ。濡れた手が相手に触れたことで、人からいじられたり嫌な言葉を言われたりしたことはないが、世間的には、手汗が気持ち悪い・汚い印象があると感ずるため、手汗をかく人だとは思われたくない。

何も気にせず手を繋ぐことができるのは、家族と今の彼氏だけだ。付き合って約1年半が経つ今の彼氏に対しても、それまでの彼氏と同様に、最初は手を繋ぐことを避けていたが、「本当に気にしないから」と言われ強引に手を繋がれた。その時自分は「嫌がられるんじゃないか」と不安で早く手を離したいと思ったが、その後も毎回彼氏から手を繋いでくれて、「この人がいいならいいか」と思うようになった。それまで多量な手汗を悩みとして真剣に打ち明けた人はほぼいなかったが、今の彼氏にだけは「〔自分は〕常に手汗をかくタイプの人間で、自分の中でも〔多量な手汗は〕結構コンプ、コンプレックス」だと話した。彼氏は「別に気にしないし大丈夫だよ」と言った。彼氏と何も気にせず手を繋げるようになったのは、強引に手を繋がれたことをきっかけに徐々に手を繋ぐことに慣れたことと、コンプレックスを打ち明けた時に彼氏が「理解して受け入れてくれた」ことが理由だと思う。ただ、手汗に対する嫌な気持ちは変化しておらず、もし今の彼氏と別れて次に誰かと付き合うことになったとしても、その人に対しては手を繋ぐことを最初は拒否するだろうと思っている。

手汗は「基本的には気になってる」が、「急になんか自分の中で『すごい嫌だな』」と思った時に、治療方法を調べた。「明確にどういうふうな時期に、その気になるとか、そういうのはなくて」、急に気になり始め、治療欲求が「めちゃくちゃすごく高まる時」もあった。治療方法については、塗り薬や電流など色々見たが、手術の副作用の重さに驚いた。汗を止める代わりに、違う場所の汗が増えるという。また、自分ほどに手汗が酷い人と出会ったことがない上に、中学3年生の頃に買った市販の薬が効かず、自分の手汗の量が他人とは違うことを実感した。

しかし、現在は治療のために病院を受診しようとは考えていない。時間が経ち、年を取れば症状が落ち着くのではないかと思うからだ。また、副作用のリスクのある手術に関しては、手術をしたとしても、どちらにしろ汗に悩む日々は終わらないと思うため、やりたいとは思わない。

Bさん、22歳の女性。中学時代に初めて医療機関を受診し、漢方・塩化アルミニウム・

イオントフォレーシス・ボトックス注射の治療を経て、大学時代に ETS 手術を受けた。手術後は脚の裏側全体と背中に代償性発汗が生じている。手術前、手汗による日常生活への支障は、携帯や紙が濡れる、楽器の弦が錆びる、手を繋ぐことに抵抗がある、手が滑ってボルダリングが上手くできない、レジのアルバイトでお金の受け渡しに困る、など頻繁にあった。

物心ついたときから手汗をかきやすいことがコンプレックスだった。発汗量は、手に汗握るぐらいの時もあれば、汗が滴るほどの時もあった。ただ常に触れると分かるほどの汗はかいていた。「躁うつ」(21)を経験しており「うつのターン」の時は手汗への苛立ちややるせなさを感じ、手汗をかきやすいことを解決したくなって病院を受診することが多かった。一方普段は手汗を気にしているとキリがなく、どうしようもないと思っていた。

中学時代。近所の皮膚科へ親と行った時、違う用件のついでに手汗について相談した。治療方法があると知り希望を抱いたが、処方された漢方や塩化アルミニウムはどちらも効果が感じられなかった。学校生活では一度だけ男子に手汗を指摘されたことがあり記憶に残っている。

高校時代。効果はないだろうと思いつつ、手汗が気になるイベント前は、気持ちの安心のために「喉が渇く薬」(22)や塩化アルミニウムをもらいに病院を受診したが、効果はほぼなかった。最終的な解決策として手術を考え始めるようになった。同じ頃、一日の中で顔や外見について悩む時間が多くなり、自分が醜形恐怖症であると認識した。手汗も自分の納得がいけない外見の一つで「醜形」だと思った。なぜ自分だけ過剰に手汗が出るのか。過半数の人の当たり前が自分にとっての当たり前ではないことが悲しくて苛立ちを覚えた。上手くいかないことを手汗含め外見のせいにしてしまうこともあった。親から「自分の満足いかないような感じにしちゃってごめんね」と言われたが、自分の運が悪かっただけで誰のせいでもない。病院代を出してくれたのも、親としての申し訳なさがあったからだと思う。

大学時代、一人暮らしを始めた場所は、地元よりも専門的な病院の多い都会だった。時間とお金の余裕ができ、より幅広い治療方法を試すようになった。病院は治療の種類によってそれぞれ費用対効果を重視して選び、費用はバイト代で支払った。大学2年生の頃に受けたボトックス注射は泣くほど痛く「二度とやらない」。効果もなく手汗の程度の重さを再認識した。3、4万円したため費用の面でも負担が大きかった。同時期の2、3カ月間、週に1、2回通ったイオントフォレーシスは「[手術以外の治療では]唯一マシになっ

た」。ただ費用や時間はかかり、それに見合った効果ではなく不満が残った。同じバイト代・時間でも、友達と違って自分は「普通の人が持っていることのために」治療をしていることが虚しかった。

大学4年生の頃、医者による ETS 手術説明会を訪れた。自分以外にも約 10 人の患者が来ていた。自分はその日のうちに手術を決断した。全身麻酔のため一日入院することを勧められたが、費用を抑えるために半日入院で帰宅した。総額 6、7 万円だったが安いと思う。術後は全身麻酔の管が入っていた場所を中心に上半身がすごく痛かった。手汗が止まると同時に、脚の後ろ側と背中に代償性発汗が出た。不快だったが手汗よりばれにくいいため「マシだな」と思った。手汗が出ないことはとても嬉しかったが、1 週間もするとそれが当たり前になり、「前の状態が思い出せなく」なった。

ETS 手術を即決したことには、高校 2 年生の頃に初めてした整形〔埋没(23)〕の経験が影響している。当時自分は整形に対しての偏見を持っており、埋没をしたい気持ちとの葛藤があった。しかし体に手を加えることへの抵抗よりも自分の見た目に関する辛さが勝り、整形に踏み切った。それが ETS を含む様々な手術をすることにハードルを感じなくなった「分岐点」だった。

C さん、22 歳の女性。手汗による日常生活への支障は時々あり、手汗は多少気になるが辛抱できる。小学生の頃、手にあせもができて近所の皮膚科を受診した。処方された軟膏によりすぐに治った。高校 2 年生の頃、汗疱(24)ができた。当時通っていた大学病院（別の病気のため）で漢方を処方されて治った。おそらく手汗が手のあせもと汗疱に少なからず影響していたと思う。手汗は両手に対称的に出る。

「小さい時からよく手に汗かく子っているじゃないですか」。自分はそういうタイプの子供だった。手汗が気になり始めたのは小学 2、3 年生の頃だ。バスケットボール部の練習で円陣を組んだり手を繋いだりする時に、先輩から手汗をいじられたことがきっかけだ。部に在籍していた小学 2 年から小学校卒業までの時期が、最も頻繁に手汗を指摘された時期だった。「体育会系」の部活で上下関係が厳しく、いじられても何も言えなかった。先輩に対して上手く気を遣える後輩が気に入られていたが、自分はあまり「上手なタイプ」ではなく、「体育会の意地という名のいじめギリギリな感じ」だった。同級生とのレギュラー争いでは、自分が一番遅く入部したにもかかわらず他の人を抜きレギュラーに入ったため、一部の同級生から手汗のことで嫌味を言われた。いじられると嫌だが、いじる子は、

努力をして上手くなった自分を妬んでいると思ったため、「だったら皆もっとうまくなればいいじゃん」と強気に思っていた。また手汗のストレスとして、ボールが手汗で滑ってしまうことや、マッキーで手のひらに「必勝」の文字を書けないことがあった。

同時期、フォークダンスで手を繋ぐ場面でも、男子から手汗を指摘されることがあり嫌だった。人と手を繋ぐことを避けていたが、繋ぐ状況になると手汗について「前置き」をした。一人でいる時は「拭けばいいかな」と楽観的でいたが、意識すればするほど出る手汗は、周囲に人がいると余計に気になり嫌だった。小学校高学年の頃は特に手汗に悩んだが、母からは「大したことじゃない」と思われており話しても意味がないと思った。インターネットで多汗症を知ったが、治し方が分からないと知りどうしようもないと思った。

中学時代。学校ではそこまで気にならなかった手汗が、塾では「めちゃくちゃ気になって」いた。授業スピードが速かったことや、苦手な数学の授業ではこれ以上偏差値を落とせないプレッシャーと焦りがあったことが影響した。高校時代では集団で過ごすことも少なく、「いい意味で人間関係が希薄」で手汗を気にすることも減った。小学生の頃とは異なり、中学以降は手汗のことで責められることもなく友達からも特に気にされなかった。

中学時代、ストレスが度重なり体調が悪くなった。いくつかの病院で、過敏性腸症候群、自律神経失調症、「きりつせい何とか症候群みたいな(25)、色々」、と次々に病名がついた。心療内科クリニックへ行くと5分ほどの簡単なアンケートで「はい、うつ病です(26)」と診断され困惑した。出された薬は成人に出す量と同量で、飲まなかった。母の知り合いの針灸や、大学病院で処方された漢方・うつ病の薬なども経験し、病院をたらい回しになったが、不調は治らず日常生活に支障が出るほどだった。その頃、大学病院で汗疱のための漢方をもらい治した。体の不調はそれから5年間全く改善せず、「飲んででも治らないし」、薬と通院を勝手に辞めた。親には「治った」と言ったが症状の悪化に気づかれ、当日予約で初診が可能だった地元の心療内科クリニックへ「連れてかれた」。胃潰瘍寸前だった。今までとは異なり問診を1時間近くしてくれた医師は、不安症やパニック症に近いが「病気病気って思わない(でよい)」と言った。胃薬と安定剤を処方されて症状が落ち着いた。

小学生から中学生までを振り返ると、自分は潔癖で完璧主義だったと思う。「手汗ひどいとか、自分がなにになにできない」ことを上手く人に伝えられなかった。また「粗探しが得意な子」がおり常に気を張っていた。特に部活の時はいじられないように人と距離を取っていた。高校では体の不調が続き、「一回ズドンて落ちちゃう(笑)」、「期待というか、

そういうのから抜けて」、辛いこともあったが少しだけ楽になった。

大学では「使った部品が自分の手汗で汚れる」のが「夏の困りごと」だ。今までの治療の何かが効いたのかもしれないが、手汗の量は年を取るにつれて減っている。

Dさん、21歳の女性。手汗による日常生活への支障は時々あり、手汗は多少気になるが辛抱できる。医療機関への受診経験はなく、手汗の原因も不明だ。両手の発汗は同量ではなく意識した方の手に汗が出る。[Dさんは手汗の程度が軽く手掌多汗症ではないと仰っていたが、手汗を意識した経験を中心に質問をさせていただくことで合意をいただいた。]

手汗が気になるようになったきっかけは、中学2年生の頃アメリカへホームステイをした時に、握手をする機会が多かったことだ。初めのうちは、手汗は気にならなかったが、日本よりも海外のほうがコミュニケーションの一つとして握手をする機会が多いことを認識してから、握手時に汗が出るかもしれないと感じ、緊張するようになった。また、ダンスパーティーで長時間手を繋ぐ時に、「手汗をかいていたらごめん」と相手に言ったこともあるが相手は「自分もかいてるから大丈夫だよ」と気にしていない様子だった。帰国後も握手する時や手を繋ぐ時には手汗が気になった。

高校生の時も、握手をする時に手汗が気になることもあったが、年を取るにつれて気にならなくなり、大学生になった今は特に気にならない。それは汗をかく機会が減ったからだと思う。中学では運動部だったことや歩き通学だったことが、手に限らず発汗の頻度を増やしていた。高校では文化部だったが、坂道を自転車で通学する時に汗が気になった。大学では電車通学で、運動もしないため前より汗をかく機会が減った。手汗に限らず、周りの人も汗をかいている状況であれば、汗をかくことに関して何の感情も湧かないが、自分だけが汗をかいている状況だと、嫌悪感を抱く。

長時間人と手を繋ぐ時に、手汗をかいていることがばれると思うが、中学2年生のダンスパーティーの時以外は、長時間人と手を繋ぐこともあまりないため、ばれることに対する不安や日常的に手汗を隠す気持ちは特にない。

手汗が多汗症や手掌多汗症と呼ばれ、治療の対象にもなることは知っている。中学生以降に何度かインターネットで手汗の対処方法を調べる中で、多汗症などの言葉に触れたため知っていたのだと思う。自分が気になったら全部調べてしまう性格であることも関係していると思う。治療については、詳しくは覚えていないが、レーザーや針を用いる方法があったと思う。ただ、手汗を止める手術をすると背中汗が増えるらしい。治療への願望

は日常的には全くない。汗が気になるような状況で、治療の存在が頭をよぎることはあったが、「そこまでじゃない」（病院に行くほどではない）。興味程度の気持ちだったため実際に病院に行くことや費用を調べることはしなかった。

Eさん、23歳の男性。手汗による日常生活への支障は時々あり、多少気になるが辛抱できる。医療機関への受診経験はなく、手汗の原因も不明だ。手汗は両手に対称的に出る。

手汗の多さを自覚したのは、小学校高学年の頃だ。周りから「お前手汗やば」といわれ、その言葉に自分も納得したことを「なんとなく」覚えている。「手だけに集中的に汗が出る」状態で、緊張する時や暑い時はより多くかく。知り合いには手汗が多いことを明かしており「理解あるいじり」をされることもある。手汗を秘密にしている手が触れた時に気づかれるよりも、あらかじめ言っておく方が気楽だ。「手汗やばいキャラみたいな感じ」である。知り合いは皆優しくて手汗を理解してくれる人が多く、「キモイ」などマイナスな言葉は言われない。自分にとって「理解してくれてる」とは、手汗に対して過度に驚かず我慢をしてくれることだと思う。

自分の手汗を知らない人との握手直前には「手汗やばいんで」と前置きをする。相手の反応が未知であることに対して緊張する。握手をすると、気まずさ、申し訳なさ、恥ずかしさを感じ、その後相手の言葉やリアクションがもらえると、その内容に関わらず安心する。このような感情の移り変わりがあるため、「はじめましてで握手しそうな」新しいコミュニティづくりをためらうことがある。

手汗をかきやすいことに対して恥ずかしさを感じている。どれだけ親しい間柄で、どれだけ相手が自分の手汗のことを理解してくれていたとしてもだ。勉強時に紙がふやけたり破けたりした時など、自分の生活に支障が出るほどに手汗が出ている時はイライラする。医学部の実技の試験では、試験前の1分間でゴム手袋を着けるルールだが、手汗で手袋に指が通らず、試験が始まってしまい非常に焦った。一方で、小学校から高校までバスケットボールをしていたが、手汗をかいている時はボールがなじんでプレーがしやすく、少し優越感があった。

高校時代、手汗をかきやすい女子と話が盛り上がり、自分だけの症状ではないことに安心した。ただその子の手汗の頻度・量が自分と比べると少ないように見え、「これだったら別に大丈夫じゃないかな」と感じたのを覚えている。

YouTube やニュースで手汗が多いことに関する特集が組まれていると「つい見たり」す

る。そこで自分の抱えている症状に名前があると知り安心した。手汗の治療方法で知っているのは、汗の分泌に関わる神経を切断する外科手術や、外用薬だ。手術には手の汗を抑える代わりに脇や足の汗の量が多くなる副作用があり、外用薬にも何らかの副作用があるらしい。新しい治療や研究がされていることを知るとすごく嬉しい。

手汗が気になり始めた頃、母親は「まあ治るでしょう」と楽観的だったが、最近は手術などを提案してくるようになった。対して自分は「周りに恵まれて」おりいじめられることもないため、副作用のリスクも考えると現段階では治療に対する強い思いはない。ただ医療機関へ行って医者にご相談してみたい。手汗による支障の程度や治療選択について、客観的な意見がもらえると安心すると思うからだ。

第5章 インタビュー調査の結果と考察

第1節 手汗をかきやすいことが気になった時

本節では、手汗をかきやすいことが気になったのは、いつ、どのような時だったかについての語りをまとめる。手汗をかいた時の当事者の気持ちと、その後の心の動きを含めて記述し考察する。

第1項 気になり始めたきっかけ

手汗をかきやすいことが気になり始めた時期は、5人とも小学生から中学生の頃であった。Aさんは小学2年生の頃、友達との遊びや会話のなかで手汗を意識した。

気になり出した時期は、結構もう多分、昔で、あんまり覚えてないんですけど。なんかすごい自分の中で印象に残ってる、なんかすごい、記憶があるのがきっかけというか、そういう記憶は、なんか小学校2年生ぐらいの時に、みんななんか友達が、みんなにペンで、マッキーペンで、指先にこうニコチャンマークを描いてたんですよ。その時に自分だけ、手汗があるから、ペンが滲むんですよ。でそれが、なんかすごいなんか、なんか嫌だったっていう記憶がすごい残ってて。[中略]「滲むね」みたいに言われたんですよ。それがなんかすごい、なんか、その気にしてたところに、こうダイレクトになん

か言われた感じが、多分すごいその時初めて、ダイレクトに言われた感じで、多分、自分の心の中にグサツときたみたいな感じだと思うんですけど。

Aさんは物心ついたときから手に汗をかきやすく、「あんまり〔手を〕触ってほしくないみたいな感情は、なんかずっとあった」と言う。(友達が〔自分を含め〕みんなに対して絵を描いていた)状況では、集団の中で「自分だけ」インクが滲んだことが目立ち、より印象に残る経験として語られたといえる。また「滲むね」と言われたことが「グサツときた」と言い、自分だけが気にしているよりも、他人からの指摘がより心に残ったことが分かる。

Bさんは「〔手汗は〕気がついた頃にあった」と言い、一番古い記憶として小学生の頃のエピソードを語った。

弦錆びるのもなんでやねんって思ってた。小学生ぐらいの時から、その、家でやたらもう自分のやつだけネックひたすら拭いてた。ネック、あ、首の部分、あの弦を抑えるじゃない、楽器って、でそのやつをやたらうちだけ拭いてたなっていう記憶がある。

Bさんはバイオリン〔習い事〕のネックが手汗で濡れてしまうためよく拭いていたという。弦が水分で錆びやすいことから、手汗が楽器を扱う時のストレスになっていたことが分かる。家族も楽器を扱っていたが手汗をかくのはBさんだけだったため「うちだけ」、自分だけという印象を強く持ったのだろう。

Cさんは小学2年生頃から6年生まで所属していたバスケットボール部において、手汗が気になるようになった。

ちょっと小さい時から、よく手に汗かく子っているじゃないですか。私、結構そういうタイプの子供で。でもなんか小学校低学年ぐらいまではそんなに気にならなかったんですけど、そのときバスケ部に入ったのがちょうど、小学校1年の終わりぐらいだったんですよね。その、バスケの活動のなかで、結構なんか、円陣組んだり、円陣の時手つないだりとか、まあ、色々する中で、結構いじ、手汗すごいと結構先輩からいじられるみたいなことがあって、体育会系だったんで、でそれに対して何も言えない、みたいな時もあったりとかして。

Cさんにとって小学生の部活動時代は、最も頻繁に手汗を指摘された時期だった。上下関係の厳しい「体育会系」の部活で「いじめギリギリな感じ」だった。部活動では円陣やハイタッチなどが多くあり、手に汗をかきやすいことが人にばれやすい。そしてレギュラー争いや厳しい上下関係のある部活動の環境においては、手汗がCさんをいじる〔いじめ〕理由の一つとして機能するようになったといえる。いじられた時の気持ちについては、「嫌だなーって思うんですけど。だったら皆〔バスケが〕もっとうまくなればいいじゃんって（笑）。」「上手な先輩にはあんまり言われなかったんで」と、努力をしてバスケが上手くなった自分への妬みがいじりにつながったと振り返っている。

Dさんは中学2年生の頃、海外の文化に触れたときに手汗が気になったという。

中学2年生のときに、なんかホームステイとか行った時に、海外〔アメリカ〕で、あの握手をする機会が沢山あって、その時に、なんか、握手する前に緊張するみたいな時にすごい、手汗すごい、かいてるかもみたいな感じで、一番気になった、ポイントでした。なんか日本ではそんなに握手とかする機会がないから、そこまであんまり気にしてなかったけど、なんか海外の人とかと接し、接する機会っていうか、そのコミュニケーションのツールとして、やった時に、手汗が気になりました。

アメリカにおいて握手は「コミュニケーションのツール」で、日本よりも握手をする機会が多かったという。手が触れる機会の増加が手に汗をかくことをDさんに意識させた。帰国後の手汗に対する意識の変化について尋ねたところ、「握手するときとかは、なんか、思うかも。握手とか手繋いだり。」と答えたことから、日本に帰国し握手をする機会が減っても、手汗を気にする意識は消えなかったことが分かる。

Eさんは小学校高学年の頃に自覚したという。

多分、あんまり細かくは覚えてないんですけど。小学校高学年、5年とか6年ぐらいに、自覚した覚えがあります。まあその、気づいたきっかけ、は、まあ、多分自分、自分でも、こう気づいてたのもありますし、周りからその、なんですかね、別にいじめとかじゃないですけど、「お前手汗やば」みたいな感じで、まあ、言われたりとかして、（自分も）「確かにやばいな」って感じで、気づいた感じですかね。

Eさんは「なんとなくっていう記憶」と言い、明確に手汗を意識したきっかけがあるのではなく、小学生の頃の生活や会話のなかで手汗のかきやすさを認識するようになったことが分かる。「いじめとかじゃない」が、周りに手汗を指摘され自分も「確かに」と納得していたようだ。

Aさん、Cさん、Eさんは同世代の生徒から手汗のかきやすさを指摘された。Cさんの手汗は、部活の仲間からいじられる理由の一つになっていた。前思春期から思春期の期間を通じて大きく変化する友だち関係について、子どものころ専門医の小野善郎は、思春期になるとクラブ活動などを通じて親しくなる仲良しグループが生まれ、仲間とそれ以外がはっきり区別されるようになることに加えて、特に強い結びつきを持つ「親友」や異性との交際のような、より親密かつ個別的な関係へと発展すると述べた（小野 2022: 111）。そして、思春期の発達段階は個人として完結するものではなく、常に他者、特に同じ発達段階の仲間との関係性が不可欠だと述べた（小野 2022: 111）。この点において、学校生活では、帰属する集団がなかったり仲間から排除されたりすることは、居場所を失うだけでなく、いじめの対象になる危険もあるという（小野 2022: 111）。5人が手汗をかきやすいことが気になり始めた小学生から中学生の時期は、他の人と〈違う〉ということが学生同士の関係性における排除の理由になりやすく、人と違うことに敏感になりやすい時期だといえる。その時期に、〈人が手汗をかいていないのに、自分だけ手汗をかいている〉、そして〈それを人から指摘される〉経験は、当事者にとって集団からの排除や親密かつ個別的な関係の断裂を連想させる怖い出来事として、強く印象に残りうるといえる。

第2項 触れた物に汗がつく — 勉強・楽器・スポーツ

触れた物に汗がつき、濡れてしまった経験を中心にまとめる。Aさんは、「手汗が気になる場面自体は結構いっぱいあって」と言っただけで「例えば」と例を挙げた。授業中に紙が濡れて文字が滲むこと、人に借りた物に汗がつくことなどである。借りた物に汗がつくことについては「友達からペン借りた後とか、そのちょっと書いてすぐぱっと渡すときに、汗そのペンについてないかなって気になったり」と言い、自分の汗が自分の物だけでなく人の物についてしまうことも悩みの一つだったようだ。学校生活において物を受け取る・渡す場面は数えきれないほどある。手掌多汗症の高校生を取材した日本テレビの特集

でも、授業中後ろの人にプリントを渡すとき、手汗がついてしまわないように、ハンカチで手を拭く高校生の様子を紹介していた(27)。

Bさんは、弦が錆びる、携帯が濡れる、紙が濡れる、文字が滲む、ボルダリングで手が滑る、クイズ研究会で人と一緒に使用するボタンに汗がつくことを語った。ボルダリングについては以下のように語った。

高校生のときにめっちゃボルダリング流行ってて。できないのよ、滑るから、手汗で。だから私はプロのボルダリングの人には絶対なれないんだなって思った(笑)し、なんか運動神経でそんなに、苦勞することなかったんだけど、ボルダリングだけはやっぱりできないのよ。っていうのはちょっと、そう。

ボルダリングでは滑り止めの粉を手につけるが、Bさんはその粉が手汗で溶け、登る途中の壁についてしまい上手く登れなかった。笑いながら「プロにはなれないんだな」と話した。スポーツで苦勞することがなかったからこそ、手汗をかかなければボルダリングが上手くできたかもしれないという思いもあっただろう。また友達のボルダリングの誘いもあまり乗り気になれなかったと言う。「流行り」を心から楽しめなかったことへの虚しさもあったはずだ。

Cさんは、手にペンで文字が書けない、紙が濡れる、文字が滲む、部活動中にバスケットボールが滑って持ちにくいことを挙げた。Bさんと同様に、手を使うスポーツにおいて、手のひらにかく汗は支障になり得ることが分かる。

Dさんは、手が触れた物に汗がつくことについての言及はなかった。ただ、わき汗については大学時代、塾のアルバイトで先輩の前で模擬授業をする際に、緊張でスーツの汗ジミが気になったことを語った。

Eさんは、勉強中などに紙が濡れたり、文字が滲んだりしたときにイライラしたことや、(医学部での)実習や試験でゴム手袋に指が通らず「すごく焦った」ことを語った。一方でEさんはバスケットボールが手になじみプレーがしやすく、少し優越感があったことを語り、ボールが持ちにくいと語ったCさんとは真逆の感覚を抱いていた。同じバスケットボールを扱っていても感じ方が異なる理由として、手汗の程度の違いやプレーする環境の違いがあるかもしれない。Eさんは小学校から高校までプレーしていたバスケのチームメイトや対戦相手との関係性において、手汗をマイナスな意味で意識することはなかつ

たと語っていた。しかし B さんは前項までで述べたように、バスケット部の人間関係において手汗をいじられる怖さや緊張を感じていた。この違いが手汗の感じ方の違いに影響した可能性もあるだろう。

本項では、手汗をかきやすいことが、勉強時の焦りやイライラ、人に物を手渡しする時の不安、楽器の錆び、スポーツが上手くできず楽しめない苦勞につながるということが分かった。一方で手汗をかきやすいことがスポーツで有利にはたらき、優越感につながる場合もあった。

第3項 触れた手に汗がつく — 握手・手を繋ぐ・ハイタッチ

人の手に自分の汗がついたことや、〈自分の汗が人につかないように〉人との触れあいを避けた経験を中心にまとめる。A さんは、手を繋いだり、ハイタッチをしたり、手を繋ぐダンスをする時に、他人に自分の汗がついてしまうことを語った。「人が、なんかどう考えてるかとかすごい、自分が気になっちゃう性格」と自分のことを表現していた。また手を繋ぐことが恋愛の最初にあることだと言い、恋愛において手を繋ぐことを避けてしまうことの辛さを語った。

そうですね、やっぱりその、もうなんか恋人になったイコール手繋ぐっていうのは、完全になんかもう、定着してる感じがあるじゃないですか。だからこう、あーもういつ、ん、なんて言うんだろう、いつ「手繋ごう」って言われるかなとか、「もしかしたら手握られるかもしれないから、ちょっところ、手後ろの方にやっところ」とか、そういうのはちょっとありますね。

A さんは手汗について嫌な言葉を人から言われたことはないと述べていた。しかし自身気になっていると、相手からの言葉がなくても、〈手汗をかいている手と触れた時に相手を感じる気持ち〉を想像して不安を感じたのだろう。また A さんは「[手を繋ぐことを] 避けちゃったり」と表現しており、手を繋ぎたくても繋げないという葛藤が想像できる。このような思いが〈相手から手を繋がれないようにする〉行動につながっている。ハイタッチをする場面については、以下のように語った。

ハイタッチする時ってほしい、まあみんな喜んでる時とかだけど、その時にその、

だいたい、ハイタッチされそうになったら、手を、長袖だったら手を隠すか、それか、グーで返すんですけど。そういう時に、なんか相手ってやっぱりちょっと不思議に思うじゃないですか。でなんか、なんで、「なんでグーなんだよ (笑)」みたいな感じで、ちょっとノリ的に言われてもやっぱり、その自分の中で、なんか気にしちゃうっていうか、あなんかその、手のひらでタッチを返せない自分嫌だなとか、そういうのある

ハイタッチをする場面でグーでタッチをし、相手から不思議に思われたという。人とハイタッチをして喜びを共有する時に、手に汗をかいていることが気になり、自己嫌悪にもつながったことが分かる。

Bさんは「手とか絶対繋ぎたくなかった」と、相手の性別に関係なく人と距離を保つようにしていたという。「好きな人がいたとしても、そういう接触みたいなのを、基本的に取りたくない」と言い、恋愛の場面での影響にも触れていた。

Cさんは、手を繋ぐ時、フォークダンスをする時、円陣をする時に手汗が気になったという。バスケ部で手汗をいじられる経験をしたのと同じ小学生の頃、フォークダンスで手を繋ぐ時に男子から手汗を指摘されることがあり嫌だったという。

Dさんは、握手をする時や、海外でのダンスパーティー時に手汗が気になったと語った。ダンスパーティーでは長時間手を繋ぐため、握手よりも手汗が気になったという。ただDさんは「バレちゃったっていうぐらい長い時間」手を繋ぐ時はダンスパーティーの時以外は特になく、あまり気にならなかったという。

Eさんは、手が触れる時、フォークダンスをする時、握手をする時に手汗が気になり、恥ずかしさや気まずさ、申し訳なさを感じたという。学生時代、生物の先生に質問をした時のことについて以下のように語った。

すごい気まずかったエピソードがあるんですけど。自分あの、理系で、生物選択だったんですけど、生物の先生に、職員室にこう、問題の質問を聞きに行ったんですね。質問を、この問題を教えてくださいみたいな感じで。そしたらその先生は、その僕の手を掴んで、手をこう動かして、説明してくださったんですね。僕の手を使って、その、説明しよ、説明してくれたんですね、現象みたいなのを。やっぱ先生と話してるんで僕、緊張もあり、あったんで、まあすごい手汗かいてたんで、握られながらも、すごい手汗かいてたんですよ。だからそういう、そこでめっちゃ恥ずかしかった。〔中略〕なんか

すごい、にやけてたのを覚えてますけど。さすがに先生なんで、特に何も言われることなくって感じ〔中略〕多分〔自分の手汗に気づいて〕あ、やばいと思ってんだらうな、って思っていました。

先生に自分の手を動かしながら説明をされた時に、恥ずかしさや気まずさを感じたという。先生が「にやけていた」のは、自分の手汗に先生が気づいたからだと言った。先生の反応から気持ちを想像したのだらう。

本項では、触れた相手の手に自分の汗がつくと、相手の気持ちや反応が気になり、恥ずかしさや不安を感じるようになった。また握手をしたい相手、手を繋ぎたい相手、ハイタッチをしたい相手は、自分が親密になりたいと思う相手である場合が多い。親密になりたいと思う相手だからこそ、〈自分の手汗を相手が不快に感じて、自分を嫌いになってしまうかもしれない〉という思いが生じ、触れ合いを避けてしまうとも考えられる。これは「親密な関係を回避せざるをえない」（西倉 2008: 46）辛さだらう。

第4項 誰かと一緒にいる時の方が、気になる

一人でいる時よりも誰かと一緒にいる時のほうが、手汗をかきやすいことをより強く気にしていたことについてまとめる。Aさんは、自分一人の時よりも、人といる時の方が、手に汗をかきやすいことが気になったという。

自分一人の時は、別にもう自分が手汗かいてるの分かりきってることだから、まあ特に手汗、でなんか支障が出たり、まあなんか汗が気になるようなことがあっても、まあ他人にどうこう思われたい、一人だったら。でもやっぱ人といるときは、やっぱその人が、なんかどう考えてるかとかすごい、自分が気になっちゃう性格なので、その手汗自体も、なんかちょっと、例えば、あの机の上に手を置いてて、で離したら、ちょっとなんか、ちょっとなんか汗っぼいのが付いてたら、あちょっとやば、と思って(笑)、ちょっとすぐに服で拭いたり隠したりするんですけど。そういうのとか、人といるとより、気にはしますね。

自分一人の時は「分かりきってる」が、人と一緒にいる時は、手汗によって相手に不快な思いをさせていないかどうかを気にしていたことが分かる。

また A さんは「汗をかいてる状態、ってそもそもなんか人間みんな多分居心地悪いって
いうのあると思う」とした上で、世間の汗へのイメージは、気持ち悪い・汚い印象である
と語った。A さん自身も、「[スマホが] 汚れる」のように手汗に対して〈汚い〉という言
葉を用いていた。C さんも A さんと同様に、「[手汗で物が] 汚れる」と表現していたこと
から、手汗に対して「汚い」印象を持っていると考えられる。

B さんは、一人でいる時と人がいる時の、手汗に対する気持ちについて以下のように語
った。

一人でいる時は、まあ、その病んでるっていうかその、躁うつ、その、うつのター
ンだと、なんで？とか思っただけでいちいちそのなんか、むかつくじゃないけど、なんでと、な
んかやるせないっていう感じあったけど、でも基本的には気にはしてなかったかな。て
か気にしてたらもう、キリないから、だって基本的にずっと出るから、キリないから、
気にはしてなかったかな。

基本的に手汗ってばれないから、そんなに、その気にするっていうか、まあ考えること
はなかったけど、でもなんか、やっぱ生活するにおいて、ばれる時っていうか、なんか
そういう分かる時って多分、今、ちょっと浮かばないけどでも絶対あるじゃないです
か、学校生活とかで。そういう時は、どうしようみたいな感じにはなってた。

人との差みたいなのが嫌だったかな、やっぱ思春期なのはあるし、若いのもあるし。

B さんは手汗の症状について、「垂れる時もあったし、でもただ、もう手に汗握るぐら
いの時もあったし。でもまあ、触ったら分かるかなぐらい。ずっと。最低レベルでも。」と
表現した。常に手に汗をかいているからこそ、「いちいち」気にしてられないという思
いがあったのだろう。A さんの「[手汗をかきやすいことは] 分かりきってること」という
表現とも重なる。一方で、人という時は、人に自分の手汗が明らかになってしまうこと
に対する不安があったことが分かる。また〈自分と人との違い〉を人という時にはより強く
意識していたといえる。

C さんは、一人でピアノを弾いている時の「手汗ひどいなって時」には、「別に、拭けば
いいかな」と思っていたが、「相手がいる時と違って、なんか余計、意識すればするほど
止まらん、みたいな。感じがあった」と語った。そして「結構嫌な、思い出ですね」と振
り返った。

また C さんは中学時代、学校では気にならない手汗が塾では「めっちゃくちゃ」気になった経験について以下のように語った。

塾行ってる、そこで、やっぱり夏場とか、なんか学校よりも、塾の方が結構、そういう手汗とかに、私出ること多くて。〔中略〕 どんどんどんどん授業スピードが速いみたいな所だったんで、なんか、で、数学すごく苦手だったんですけど、やっぱりやらないと追いつかない、みたいなところで、こうすごいめっちゃ手汗出るのがすごい、途中でストレスになってきちゃって。〔中略〕 周りが結構ちゃんと出来るっていう、もっと自分が頑張らなきゃっていうのと、あと、なんかもうこれ以上偏差値落としちゃいけない、みたいな、プレッシャーがあつて。〔中略〕〔講師から〕 さされる〔指名される〕 んですよ、そうなんです。で、苦手なのに差されて「分かりません」で返すと、「分かりません」っていうのがすごい結構、みんな答えられるのに自分だけ言えないみたいな、プレッシャーがあつて、それで結構、いつも数学の時間は「嫌だなー」っていう気持ちを抱えながら。

C さんは学校にいる時よりも塾にいる時の方が手汗をかきやすかったという。それは〈授業スピードが速い〉塾で、〈すごく苦手な〉数学の授業を〈他の生徒と一緒に〉受けることによって生じる焦り・緊張・プレッシャーがあつたからだろう。そのような精神状態で手汗による支障に直面する〔紙が濡れる・文字が滲む〕と、焦り・緊張・プレッシャーは増幅するだろう。そして増幅した焦り・緊張・プレッシャーによってさらに手汗をかきやすくなるという悪循環が生じ、「途中でストレスになった」と考えられる。

学生時代に頻繁に訪れるテストの時間は緊張感があり、C さんが経験したような悪循環が起こりやすい。テスト時はハンカチの持ち込みを禁止され、多量な手汗に対処できない場合もある (28)。また、自分の手汗で濡れて歪んだ答案用紙を〔答案回収時に〕前の席の人に渡す瞬間もストレスになるかもしれない。序章で述べた「物事が上手くいかないことを手汗のせいにしてしまう自分への苛立ち〔実際に筆者自身が感じたこと〕」は、テストの結果が良くなかった時によく感じていた。

D さんは手汗に限らず全身の汗に対して、自分だけが汗をかいている状況は嫌だが、周りの人もかいている状況であれば気にならないと語った。

E さんは以下のように語った。

不便さに関してはやっぱりまあ、対処はできるので。そうですねなんか例えば、勉強する時とかは、ハンカチを置いてやるだとか、そういう、不便に関するに関しては、その自分一人で、自分一人の問題なので、ある程度対処して解決はできると思うんですけど、その恥ずかしさって、やっぱり他人がいて湧きあがる感情だと思うんですけど。それはちょっと、なんか根本的な対象法はない、のでやっぱりないに越し、その手汗はないに越したことはないな、毎回思うのですごい、手がサラサラの人が、いつもサラサラの人が、羨ましいなって思いますね。

Eさんは手汗による不便さは「自分一人の問題」であり対処できるが、「他人がいて湧き上がる」恥ずかしさには対処方法がないため、手汗はない方が良いと思っている。相手がどれだけ自分と親しい間柄だったとしても、「多少なり、恥ずかしさはずっとある」という。「毎回思う」という言葉に注目すると、手汗をかきやすいことによる恥ずかしさを感じる時は「毎回」手汗への否定的な感情や、手に多くの汗をかかない人への羨ましさを感じていたと分かる。

誰かと一緒にいる時には、その相手の手に汗がつく可能性があり、手汗をかいていることへの恥ずかしさ、申し訳なさ、相手に不快な思いをさせていないかどうかという不安をより感じると考えられる。また、手汗が焦り・緊張・プレッシャーを増幅させる場合もあった。〈世間は汗に対して気持ち悪い・汚い印象を持っている〉と感じ、手汗への否定的な感情を抱く人もいた。汗をかくこと自体の居心地の悪さに焦点を当てて語る人もいた一方で、自分だけが汗をかいている状況は嫌だが、周りの人もかいている状況であれば気にならない、と、自分だけが汗をかく状況の嫌さに焦点を当てて語る人もいた。

本節では、手汗をかきやすいことが気になった時について、きっかけ、触れた物に汗がついた経験、触れた手に汗がついた経験、誰かと一緒にいる時に気になる手汗、の観点から整理した。Aさんはインタビュー中、「[手汗が気になる場面は] 本当に色々あって」など、手汗が気になる場面の多さを示唆する発言を何度もしていた。Bさんも「気にしてたらもう、キリない」と語った。AさんやBさんにとって手汗が気になる場面は数えきれないほどあるのだと考えられる。Eさんは、手汗をかきやすいことをあらかじめ周囲に明かしておく理由について、「[手汗の多さに気づかれた時に] 毎回、なんだろう自分も、相手も、気を遣わなくて済む」と答えており、手汗の多さに気づかれた時の気まずさを何度も

経験していたことが想像できる。生活をするうえで、手は必要不可欠である。自分の意図に反して手のひらに多くの汗をかいてしまうという身体的特徴は、日常生活の至る所で支障としてあらわれ、そのたびに当事者の感情を揺さぶるのだ。

第2節 手汗の秘匿と告知

本節では、手に多くの汗をかきやすいことを人に隠した経験や伝えた経験があるかについて、5人の語りをまとめる。経験があるならば、誰に、いつ、どのように隠した／伝えたか。今後も隠したい／伝えたいと思うかについてもまとめる。第3項では、当事者の手汗を知る家族が、手汗をかきやすいことについてどう考えていたかについての語りを引用し、家族との関係性について考察する。

第1項 秘匿〔誰に・いつ・どのように隠したか〕

Aさんは、手に汗を多くかきやすいことに関して、人からいじられたり嫌な言葉を言われたりしたことはない。しかし世間的には、手汗が気持ち悪い・汚い印象があると感じるため、手汗をかく人だとは思われたくないといい、手汗を人に隠した経験を語った。高校時代、色々な人と手を握りながら踊るダンス〔オクラホマミキサー〕の授業があり、「長袖、体操服長袖だったから、もう、全力で手隠して、手繋いで踊ったんですけど。それは結構本当に、嫌だ、嫌でしたね。」と振り返った。また、ハイタッチをする場面ではグーでタッチをした。

Aさんは、誰かと付き合ったとしても、手を繋ぐことを避け続けていたことについて、「もしかしたら手握られるかもしれないから、ちょっとこう、手後ろの方にやっとう」としたり、「手繋がれないように、こうまあ、手を前で組んだり、あとは自ら、その手を繋ぐってよりも、腕を組む、とかをしたり」した。

誰かと付き合う前とか以外でも普通になんか、自分対人だったら、が、もういたら、ある程度その、自分の手に触れられないように、多分無意識に、してると思うので、そういう。その無意識に多分手に触れられないようにする行動っていうのは、あったんじゃないかなとは思いますがね。

相手の性別に関係なく、Aさんは人から手を触れられないようにする行動を繰り返して

いた。癖になっていたのだろう。

Bさんは手汗について「基本的にばれない」と言ったうえで、「ばれたらどうしよう」という不安もあったという。手が触れないように相手の性別に関係なく人と距離を保つ癖がついていたことに加え、「好きな人がいたとしても、そういう接触みたいなのを、基本的に取りたくない」「人間に好意的にいけない」と語った。

中学生の頃一度だけ、手汗が「ばれた時」に同級生から心無いことを言われた経験を、悲しさや怒りを感じたこととして振り返り「言われた言葉って〔心に〕残る」と語った。

なんか一回手汗ばれた時に、〔心無い言葉を〕言われて、なんかまあうちも言い返したり文句言っちゃうようなタイプだから、なんかそれでそのまま終わったけど、でもなんかそういう言われた言葉って残るじゃないですか。〔中略〕今はもう手術したし、あったなあって済むけど。〔中略〕「なんでそんな手汗出んの？」ぐらいの感じで言われたけど、でも、多分その時的には、自分的には、自分が、それが人と違うということも、自認してるから、なんかそのツッコまれるのがすごい嫌だったというか、当時。

〔言い返した言葉の内容について〕なんて言ったっけな？「いやなんで何も知らないくせにそんなこと言われなきゃいけないんだ」みたいなことを言った気がする。なんか文句言った気がする。大人数の前で言われたとかでもなかったから。

普段怒らないBさんが言い返したため、相手は驚いた反応をしていたという。自分が「自認してる」〈人との違い〉を改めて人から指摘されたため、悲しさや怒りを感じたのだろう。中学時代のこの経験が、手汗が人に知られることへの恐怖心を生み、隠したいと思う気持ちの背景にあったとも考えられる。

また、スポーツ中などに手汗に気づかれそうになった時は、「今走ってこんなしんどいから〔手汗が〕出てるだけ」と言っていたという。

Cさんは、小・中学生の頃は特に完璧主義で、人にいじられない為の壁を張り、人と距離を置いていたという。バスケ部でいじられないように、また「粗探しが得意な子」に指摘されないように常に気を張っていた。高校での体の不調を経て「期待というか、そういうのから抜けて」、辛いこともあったが少しだけ楽になったという。小・中学生の頃について「気軽にそういうこと〔自分の欠点〕が言えるぐらい、ちょっとゆるく生きてても(笑)、大丈夫なんだよってことは、振り返ると思います」と語った。

Dさんは、中学2年生のダンスパーティーの時以外は、長時間人と手を繋ぐこともあまりないため、ばれることに対する不安や日常的に手汗を隠す気持ちは特になく、手を握る状況になった時に「考えるかもしれない」という。

Eさんは、手に汗をかきやすいことを周囲に明かしておく方が気楽だったという。

第2項 告知 [誰に・いつ・どのように伝えたか]

Aさんは、付き合い始めてから約1年半が経つ今の彼氏に対して、手に多くの汗をかくことが自分のコンプレックス・悩みであることを打ち明けた時のことを語った。

[彼氏から半ば強引に] 手繋いだあと、とかに、なんかまあちゃんと、ある程度日数が経った後で、何ていうか、一番本当に、なんていうか、常に手汗をかくタイプの人間で、自分の中でも結構コンプ、コンプレックスっていう話を、したと思いますね。で、[彼氏は]「別に気にしないし大丈夫だよ」みたいな感じ [で答えた]

彼氏と何も気にせず手を繋げるようになったのは、強引に手を繋がれたことをきっかけに徐々に手を繋ぐことに慣れたことと、コンプレックスを打ち明けた時に彼氏が「理解して受け入れてくれた」ことが理由だと語った。元彼とは繋げなかった手が、今の彼氏とは気にせず繋げるようになった。この経験によって手汗への嫌な気持ちや人への距離感の保ち方が変化したかについてAさんは、手汗に対する嫌な気持ちは変化しておらず、もし今の彼氏と別れて次に誰かと付き合うことになったとしても、その人に対しては手を繋ぐことを最初は拒否するだろうと答えた。Aさんの今の彼氏との関係性については、「スティグマを隠すことによって一度は失うことになった親密な人間関係が、きわめて限られた範囲ではあるが、新たに生成している」(西倉 2008: 45) と表すこともできると考えられる。

Cさんは小学校のレクリエーションの手を繋ぐ場面で「めっちゃ手汗かくよ」と前置きをした。相手の反応によっては、手ではなく相手の服の袖を掴んでいたという。

Dさんは手を繋ぐ時に手汗について相手に確認を取っていた。

緊張し過ぎて、なんか手汗かいてたらごめんみたいな感じで(笑) 言ったときもあるけど、でも別に普通の握手ぐらいだったら、そんなに、一瞬だけっていうか、そんなあれだけど、なんか、なんかダンスパーティーみたいな時があって、その時に長時間手繋ぐ

時に、なんかごめんみたいな感じで言ったことあるけど、でも普通に、握手するぐらいだったら特に。自分では緊張してるから、手汗すごいかもって思ってるけど、向こうはわからない。

「一瞬だけ」の握手であれば、自分では手汗を気にしていても、相手は気づかなかったという。

Eさんは、知り合いに手汗が多いことを明かしており「手汗やばいキャラみたいな感じ」になっていた。手汗を秘密にしている手が触れた時に気づかれるよりも、あらかじめ言っておく方が気楽だという。自分の手汗を知らない人との握手直前には「手汗やばいで」と前置きをしたが、相手の反応が未知であることに対して緊張した。握手をすると、気まずさ、申し訳なさ、恥ずかしさを感じ、その後相手の言葉やリアクションがもらえると、その内容に関わらず安心したという。Eさんの感情は〈前置きから手を繋ぐまでの一連の動作〉に伴って移り変わった。そこには緊張感が伴うため「はじめましてで握手しそうな」新しいコミュニティづくりをためらうことがあるという。

Eさんは自分から手汗の多さを打ち明けていたからか、自分以外の手汗をかきやすい子と、手汗の話で盛り上がった経験があるという。自分だけの症状ではないことに安心したが、その子の手汗の頻度・量が自分と比べると少ないように見えた。「そんな悩むほど、の量じゃなくないか？別にその、悩んでる感じではなかったですけど」「これだったら別に、大丈夫じゃないかな」と思ったことを笑いながら話した。当事者間でも手汗の程度や感じ方が異なることに対して、少しの戸惑いがあったことが分かる。

第3項 家族の反応

幼いころから手に汗をかきやすい当事者の家族は、当事者の手汗のかきやすさを元から知っている。家族が手汗についてどう思っていたか、印象に残る会話はあったかについての語りをまとめる。

Aさんは、自分の手汗の多さについて家族は「自然と知ってる」といい、「深く喋ったことはないので、そういう言葉で印象に残ってるとかはないかなという感じ」と答えた。

Bさんは、手汗で悩んでいたことに対して、親に謝られた経験を語った。

親だから、なんかそういう感じに、自分の満足いかないような感じにしちゃってごめん

ねみたいなの。でも、言われるけど、でもまあ別に、遺伝の問題でもないだろうし、私しかいないから。とか別に親の責任でもないし、ただまあ、うちは運が悪かったんだぐらいの、感じだったから。まあ親としては申し訳ないぐらいの感じだと思う。

手掌多汗症の治療代を出してくれた〔高校生まで〕のも、親としての申し訳なさがあったからだろうと言った。

Cさんは、家族から手汗をかきやすいことが悩みだと思われていなかったと語った。

小5とかの時は〔手汗に〕結構悩みましたね。高学年、中高学年になってから悩んでたんですけど、あんまりなんか、取り持つ、なんかそういう風に、そんな大した病気とか、そんな大したことじゃないだろうぐらいだったんで、なんか話しても意味ないやが勝っちゃってたかもしれないです。〔中略〕多分小さい時から手汗がよく出てたんで、なんか治しようもないしっていうところで、そこまで深刻に受け止められなかった

幼少期から、Cさんが手汗をかくことは家族にとっての〈当たりまえ〉だったといえる。だからこそ、成長するにつれて手汗が悩みとして解釈されるようになったことが、家族には理解されなかったのだろう。同時期にインターネットで治し方が分からないと知ったことも影響して、諦めの感情を抱いたと考えられる。

Eさんは、自分の手汗に対する母の態度が変化したことについて語った。

手汗に気づき始めて最初の頃は、母親も、まあ時間が経てば治るよみたいなの、楽観的だったんですけど、まあそれが、ずっと続いているので今まで。最近はやっぱり、まあ手術受けてみたらとか、そういうさっきの、神経を切る手術とか、母親もなんか調べているのか分からないですけど。深刻なというかやっぱり、特に深刻な話はしたことはないんですけど、昔ほどそんな楽観的ではなく、まあ「こういう治療法があるけど、やってみたら？」みたいなの、そういうちょっと具体的な話に、なってるなとは思いますがね。

時間が経てば治る、と手汗に対して楽観的だった母親が、最近になって治療を勧めるようになったという。

本節では、手に多くの汗をかきやすいことを人に隠した経験、伝えた経験、今後も隠し

たい／伝えたいと思うか、そして家族との関係性についてまとめた。隠したいと思う理由として、世間的な手汗へのイメージが悪いこと、手汗が〈ばれて〉傷ついた経験があることが示唆された。人と距離を取り手汗を隠す癖がついていた人もいた。手汗を伝える時としては、親密な関係にある人に対して〈自分の心にある深刻な悩みとして手汗を打ち明け〉信頼関係が築かれた場合や、手が触れそうな相手に対して〈相手に手汗がついてしまうことを前置きとして伝える〉場合があったと考えられる。家族との関係性においては、親に謝られた経験や、家族から手汗をかきやすいことが悩みだと思われなかった経験、治療を勧められるようになった経験が語られた。

第3節 治療経験とそれに対する考え

本節では、手掌多汗症の治療についての当事者の考えを探る。治療について知っている情報はるか、治療した／しなかったのはなぜか、実際の治療を経て抱いた思いについて考察する。

第1項 治療をした／しなかった理由と、今後したいと思うか

本項では、多量な手汗の治療について知っていることについてまとめる。治療した／しなかった理由とその背景にある経験等も含めて考察する。

Aさんはインターネットで治療について調べたことがあり、塗り薬や電流、手術について知ったが、手術の副作用〔代償性発汗〕の重さに驚いたという。Cさんはインターネットで多汗症を知ったが、治し方が分からないと知ったという。Dさんはインターネットで知った治療について、レーザーや針を用いる方法があったと思うといい、「手汗を、止めようとする手術をすると、その多汗症の、背中が汗がすごくなるらしい」と代償性発汗についても触れた。EさんはYouTubeやニュースで手汗が多いことに関する特集が組まれていると「つい見たり」したという。治療方法で知っているのは、「〔汗の〕分泌に関わる神経を切断する」「外科手術」や、「〔神経の〕働きを抑える外用薬」だという。手術には手の汗を抑える代わりに脇や足の汗の量が多くなる副作用があり、外用薬にも何らかの副作用があると認識していた。

ETS手術を経験したBさん以外で、手術には副作用〔別の場所に汗をかきやすくなること〕の可能性あることを耳にしたことがあったのはAさん、Dさん、Eさんであった。神経を切る手術の副作用により、別の場所から汗が出るという情報は、その他の治療と比

べて印象に残りやすいのかもしれない。

治療について知った時や、治療をしたいと思った時について、Aさんは「明確にどういうふうな時期に、その気になるとか、そういうのはなくて」、急に気になり始め、治療欲求が「めちゃくちゃすごく高まる時」もあったという。

Bさんは中学生の頃、手汗以外の症状で受診した皮膚科で治療方法があると知り希望を抱いたが、処方された漢方や塩化アルミニウムはどちらも効果が感じられず、高校生の頃になると「熱量は、そんなにめちゃくちゃ高くはなかった」「手術しかないよな」と思ったという。また、治療をしたいと思ったときについて、「うつのターン」の時は手汗への苛立ちややるせなさを感じ、手汗をかきやすいことを解決したくなって「ネットをひたすらあさり、探し続け」病院を受診することが多かったと語った。また、ETS手術を即決した理由として、高校2年生の頃に初めてした整形の経験により、手術をすることへの抵抗を感じなくなっていたことを挙げた。

Cさんは、特に手汗に悩んだ小学校高学年の頃にインターネットで多汗症を知ったが、治し方が分からないと知り、「治療法がないってなると、諦めっていうか」と、どうしようもないと思ったと語った。

Dさんは治療について、「日常的には全く思わないけど、それで緊張したりした機会とか、あとなんかその自転車とか漕ぐそういう機会〔汗が気になる機会〕が、生まれた時に思うかもしれない」という。

Eさんは、YouTubeやニュースで手汗が多いことに関する特集が組まれていると「つい見たり」したという。「自分の手汗が治るかもしれないという希望を持てる」ため、新しい治療や研究がされていることを知るとすごく嬉しいと語った。手掌多汗症という病名がつくことについて、手掌多汗症でないことに越したことはないが、自分の抱えている症状に名前がつき、同じ手掌多汗症に悩む人がいることが認識できたため、「割と安心して側面が大きい」と語った。また、「カウンセリングみたいな、ちょっと相談だけ、してみたいなっていうのは、まあ思ってますね。」と述べた。

〔専門家の〕言葉がもらえると、まあ安心するのかなという気はします。〔中略〕客観的な視点から、あの治療した方がいいのか〔中略〕選択肢が与えられて、まあこれがいんじゃないかみたいな、案を提示されたら、それに自分は従う気がしますね。

Eさんは客観的な視点から自分の状態が意味付けされることによって、安心すると予想しているといえる。医学部に在学中であることから、医療や医師に対する信頼感が比較的強いといえるだろう。

今後医療機関を受診したいかについてAさんは、現在は治療のために病院を受診しようとは考えていないという。年を取れば手汗をかく量が落ち着くのではないかと思うからだ。また、副作用のリスクのある手術に関しては、手術をしたとしても、どちらにしろ汗に悩む日々は終わらないと思うため、やりたいとは思わないと語った。Dさんは「死ぬほどやりたいとかそういうのじゃなくて、ちょっとやってみたいなぐらい」と興味程度の気持ちで、「そこまでじゃない」（病院に行くほどではない）と語った。Eさんは、現段階では治療に対する強い思いはないという。

僕は幸い、周りの人間に恵まれて、なんかこう特に、手汗でいじめられるみたいな、そういうマイナスなこともなく、割とみんなに理解してもらえて、きたので、まあそこまで絶対治したい、そんな副作用のリス、リスクじゃないですか副作用、があるかもしれないのに、そこまで治したいっていう思いは特になくて。このまま、ちょっとまあ、今まで通りのコミュニケーションがとれていけたらなというふうに考えています。まあただその、副作用がない治療みたいなのが出てきた時は、まあ、積極的に、積極的に検討しようかなーと思ってます。

いじめられたこともなく周りに恵まれているため治療を強く望んではいないが、副作用のリスクがなければ検討したいという。Eさんにとって〈手汗を理解してくれること〉とはどのようなことかについての質問に対しては以下のように答えた。

我慢してくれてるっていうか。うーん、毎回毎回こういちいち、驚かずに「やっぱり〔手汗〕すごいね」ぐらいの感じで毎回、まあ我慢してくれつつ、なんかこう、触るというか。まあ、例えばその、フォークダンスとか、体育の。そういう時に、やっぱり女子全員と、こう手繋ぐと思うんですけど。そういう時にこう、毎回人が変わるごとに、驚かれるという、驚かれるっていうかなんか「え？」って感じのリアクションを取られるというよりは、「めっちゃ〔手汗〕かいてるね」ぐらいの感じで、円滑になんか、はい、まあ理解してくれてることでまあ、多少なり我慢してくれてると思うんですけど

ど、コミュニケーションが円滑になる気がしていました

Eさんにとって〈手汗を理解してくれること〉とは、相手が自分の手汗に対して過度に驚かず、我慢をしてくれることであったようだ。あらかじめ周囲に手に汗をかきやすいことを明かしておくことによって、実際に握手や手を繋ぐ時に相手が〈手汗を理解してくれやすく〉し、気まずさや恥ずかしさを最小限にしようとしていたと考えられる。また、「我慢してくれてる」「手汗でいじめられるみたいな、そういうマイナスなこともなく〔自分は恵まれている〕」という表現から、手が触れると相手に不快な思いをさせてしまうという気持ちや、手が触れる相手への申し訳なさが伺えた。Eさんの語りから、治療をしたいと思わない理由の一つに、〈周囲の人々が多量な手汗に対して過度に驚いたりいじったりしない環境〉があると分かった。

本項では、治療について調べた時や、治療をしたいと思った時、今後医療機関を受診したいかどうかについてまとめた。治療について調べたのはどのような時だったかについては、急に気になり始め、治療欲求が「めちゃくちゃすごく高まる時〔Aさん〕」や、手汗への苛立ちややるせなさを感じ、手汗をかきやすいことを解決したくなった時〔「うつのターン」のBさん〕、汗が気になった時〔Dさん〕、YouTubeやニュースで手汗が多いことに関する特集を目にした時〔Eさん〕だった。治療に関して調べた後の気持ちについては、治療法があると知り希望を抱いた場合〔中学時代のBさん・Eさん〕や、治療が効かず「手術しかない」と諦めの気持ちを抱いた場合〔高校時代のBさん〕、そして治し方が分からないと知りどうしようもなさや諦めの感情を抱いた場合〔Cさん〕があった。

医療機関を受診した理由については、手汗をかきやすいことを解決したいと思ったこと〔Bさん〕が挙げられた。今後受診してみたいと思う理由については、客観的な視点から自分の手汗の状態を把握して安心したいという気持ち〔Eさん〕が挙げられた。第2章では多量な手汗が医療化したことの影響として、医療による治療の可能性が開かれることや、「病者の経験を語りに換える資源」(野島 2021: 7)として医療の言葉が当事者にとっての心理的な救いになることを指摘した。手に多くの汗をかきやすい当事者にとっても、多量な手汗の医療化は希望になりうる。また、手に多くの汗をかきやすいということが、手掌多汗症という病名のつくものであると周知されることは、実際に当事者の安心感にもつながっていた。

一方で、受診したいと思わない人もいた。理由は、年を取れば手汗をかく量が落ち着く

のではないか〔Aさん〕や、副作用のリスクのある手術をしたとしても、どちらにしろ汗に悩む日々は終わらないという思い〔Aさん〕、病院に行くほどではないと自分の症状を捉えていること〔Dさん〕、周りに恵まれている〔周囲の人々が多量な手汗に対して過度に驚いたりいじったりしない環境〕こと〔Eさん〕だった。多量な手汗に悩み、治療についての情報を知っていたとしても、医療機関を受診しない選択をする人もいるのだ。第2章で、多量な手汗が医療化されると、〈多量な手汗＝手に汗をかく人の個人的な問題〉であり、治療で解決すべきことだとみなされるようになると論じた。Eさんのように、多量な手汗を抱えていたとしても、周囲との関係性によっては治療への強い欲求が生じないこともある。また、副作用のリスクのある治療や不可逆的な手術に対して、怖さや否定的な感情を持つ当事者もいる。このような考えを考慮することなく、医療による治療だけが悩む当事者を救うとする見方や、病院への受診率の低さを問題視することには慎重になるべきだろう。

第2項 実際の治療を経て抱いた思い

本項では主にBさんの経験を引用し、実際の治療経験のなかで当事者が何を思ったかを記述する。

Bさんはボトックスの治療が効かなかったことに対して、「それを超える手汗」だと述べ、自分の手汗の程度の重さを認識したことを語った。Aさんも、「医療機関における治療ではないが」手のひらに塗る制汗剤をインターネットで購入した際に、「全然効かない、効かなくて。」「こんなので、効くような手汗の量ではないんだな、みたいな(笑)」「自分の手汗って本当に多いんだなーみたいなのを、なんか再認識した」と語っていた。薬や治療の効果が感じられなかった経験が、当事者に自身の手汗の程度の重さを実感させた。

様々な治療をしてきたBさんは、「みんなバイトして稼いだ数千円を、なんで私は、普通の人が持つてる事のためにやらなきゃ(いけないのか)って思って」と語った。Bさんは手に多くの汗をかきやすいことが「少数派」で「人と違う」辛さを強調して語っていた。「普通」になることに対する欲求の大きさと同時に、「普通」になるためにお金を払い治療することに対する虚しさが伺えた。

Bさんは、ETS手術後は脚の裏側全体と背中に代償性発汗が生じているという。その汗は今までの手汗と同じように出ているという。Bさんは、脚や背中にかく汗は手汗よりは分かりにくく、手にかく汗による支障の方が多かったため、「脚、なんかこの裏とかって

分かりにくいから、まあ嫌だけど、不快だけど、でもまあ。手汗よりはマシかなぐらいな感じ。」と語った。現段階で治療をしたいとは考えていないAさんは、手術をして手に汗をかかなくなったとしても、別の場所からの汗に悩むことの嫌さについて「結局コンプレックスが残る」と語っており、Bさんとの違いが見られた。

Bさんは手術を経て、人との接触を増やそうという思いはないが、手を繋ぐことに関しての抵抗感はなくなったという。手術をするまでは、「いきなり手掴まれるとかさ、そういうパターンを想像して」「今までは最悪のパターンを想像して、予防線はったりして」いたが、「そういうのはなくなったかな」という。

本節では、5人の治療に対する考えをまとめ、多量な手汗の医療化について考察した。多量な手汗の医療化が当事者にとっての希望につながるため、治療をしたいと思う人もい一方で、多量な手汗に悩み治療についての情報を知っていたとしても、医療機関を受診しない選択をする人もおり、医療による治療だけが悩む当事者を救うとする見方や、病院への受診率の低さを問題視することには慎重になるべきだと考えた。また、薬や治療の効果が感じられなかった経験が、当事者に自身の手汗の重さを実感させること、「普通」になるためにお金を払い治療することに対して虚しさを感じる場合があること、手にかく汗と脚や背中にかく汗の違いをどう考えているかが、代償性発汗に対する認識の違いに影響することが分かった。

第4節 手汗をかきやすいことに悩んだ／悩まなかった時期

本節では、調査協力者5人の人生において、手汗をかきやすいことに悩んだ時期、深刻なことだと思った時期、逆に悩まなかった時期はあったかについてまとめ、手汗への感じ方がなぜ変化したのかを考察する。また、手汗への感じ方の個人差にどのような要因があるのかについても考察する。

Aさんは、手汗に悩む程度に変化はなく「ずっと気になってる」「自分の中の一番のコンプレックス」「悩み」と表現した。「常に手汗をかくタイプの間」「手のひらでタッチを返せない自分嫌だな」「手汗をかく自分っていうのは、あんまり好きじゃないな」と、手汗をかく自分自身を捉えた。今の彼氏と手を繋ぐことができるようになった後も、手汗そのものに対する嫌悪感に変化はなく、他の人に対しては手を繋ぐことを避けるという。Aさんは、「自分と同じように手汗をかく子」に高校3年生の時初めて出会ったが、「基本的には、ここまで、自分ぐらいまで手汗酷い人」に会ったことがないと語った。Eさんも、

自分よりも手汗の頻度や量が少ないと思った当事者がいたことを語っていた。Aさんのコンプレックスには、自分と同じ量の汗をかきやすいた当事者がいなかったことが大きく影響したといえるだろう。第1章で述べた、手に汗をかきやすい状態の可視性の低さ〔主に手に直接触れることで手汗が明らかになる〕は、当事者が「自分と同じように手汗をかき子」を見つけづらくし、〈自分だけ人と違う〉という悩みを増幅させるといえる。

Bさんにとっての手汗は醜形恐怖症の一要素だった。「ずっと昔から、やっぱ嫌だとは思ってきて」いた。「他のものも嫌なのに、なんで手汗までも」という表現があったことから、自分の嫌な部分が多量あり、その中の一つとして手に多くの汗をかきことが捉えられいたと分かる。Bさんにとっての手汗は、手汗以外の自分の嫌な部分を思い起こさせ、自分自身への否定的な感情を増幅させる存在でもあり、深刻な悩みとなったのだろう。中学時代は、多量な手汗の治療方法を知り希望を抱いたが、治療をしても効果が表れなかったことから、高校時代は「手術しかない」と諦めの気持ちを抱いた。「手汗をかき人間っていうのも嫌」「そのアイデンティティは欲しくなかった」と語り、手術後は嬉しかったが、数週間すると手に汗をかかないことが当たり前になったという。

Cさんは、「手に汗かき子」と自分を表現した。小学校高学年の頃は手汗によって人からいじられる経験が多量、悩みとして気にしていたという。家族に相談しても、手汗をかきやすいことが悩みだと認識されなかった。中学時代は塾にいる時だけ手汗がストレスとして感じられたという。人から手汗をいじられることが減ったことや、この時期から他の病気の闘病が始まったことから、手に汗をかきやすいことを気にする瞬間が徐々に減っていったと考えられる。高校時代は集団で過ごすことが減り、手汗のことで責められることもなくなったため、手汗を気にする機会が減ったという。大学時代も手汗によっていじられることがなく気にならない。手汗による不便さについても、「夏の困りごと」と表現しており、悩みとして認識しないようになったと考えられる。また手の発汗量が年を取るにつれて減ったという。発汗量の減少も手汗が気にならなくなった要因の一つだろう。

Dさんは、手汗を気にした経験があるという認識だったため、手汗を自分と結び付けて「手汗をかき人間」のように捉えてはいなかった。中学時代のホームステイをきっかけに手汗が気になるようになった。高校時代も握手をする時に手汗が気になったが、年を取るにつれて汗をかき機会が減り、大学生になった今は特に気にならなくなったという。

Eさんは、「『自分は手汗かき人間だ』や『手汗かき人だ』と思ったことがありますか」という質問に対して「そうですね、はい」と答えていた。手汗が特に気になった時期や、

気にならなくなった時期はないという。「なんならずっと〔気にしている〕っていう感じかもしれない」と語った。一方で治療に関しては、周囲の人々が多量な手汗に対して過度に驚いたりいじったりしない環境であるため、強くは望んではいなかった。

以上から、手汗への感じ方が時期によって、また人によって異なる要因には、発汗量の違い、汗をかく機会の違い、関心事の違い〔他の病気の影響など〕、周囲の人々の反応の違い〔いじられる環境・過度に驚かれずいじめられない環境〕、自分と同じ頻度・量の汗をかく当事者がいたかどうか、が挙げられるだろう。手に多くの汗をかくことが悩みになるかどうかは、単純に量や頻度だけで決まるのではなく、環境や状況、それぞれの関心ごとによっても変化するのである。

終章

これまでの議論を踏まえて、終章では、序章で挙げた3つの問い〈手に多くの汗をかきやすいことは、当事者の生活や価値観にどのような影響を与えるのか〉〈多量な手汗の治療に関する経験は、当事者にどのような影響を与えるのか〉〈現代社会において、多量な手汗やその他の身体部位からの発汗にはどのような意味が付与されているのか〉について考察する。

第1章では、手に多くの汗をかくことを社会的に分析する端緒としてスティグマ論を検討した。手に多くの汗をかく人々が経験する生きづらさを他の生きづらさ〔顔に大きなあざや傷跡のある人々・ロキタンスキー症候群の人々・痙攣性発声障害の人々〕と比較しながら、手に多くの汗をかくことがスティグマ化されていることを述べた。

第2章では多量な手汗の医療化について論じた。そこでは、多量な手汗の医療化には、手汗を治すべきものとしてみ直す側面があり、社会や環境自体が、多量に手汗をかく当事者にとってどのようなものかを見えにくくする可能性を指摘した。また一方で、野島の言う「病者の経験を語りに換える資源」(野島 2021: 7)として、医療の言葉が当事者にとっての心理的な救いになる可能性もあることも指摘した。

第3章では、インタビュー調査の予備調査として実施したアンケート調査の概要と結果を示した。質問内容や回答者の偏りには不十分な点があったが、手のひらの汗が日常生活

に影響する場面の多さや、手のひらに多くの汗をかく人の認知度の高さが示唆された。

第4章では、手に多くの汗をかいた経験のある人と、手掌多汗症の診断・治療経験がある人を対象としたインタビュー調査の目的、方法、協力者のプロフィールをまとめた。20代の女性4人と20代の男性1人にインタビュー調査に協力いただいた。

第5章では、インタビュー調査の結果を示しながら考察した。

第1節では、手汗が気になった時のことを4つの観点から整理した。1つ目はきっかけだ。〈人が手汗をかいていないのに、自分だけ手汗をかいている〉、そして〈それを人から指摘される〉経験は、当事者にとって集団からの排除や親密かつ個別的な関係の断裂を連想させる怖い出来事として、強く印象に残りうるといえる。2つ目は触れた物に汗がついた経験だ。手汗をかきやすいことが、勉強時の焦りやイライラ、人に物を手渡しする時の不安、楽器の錆び、スポーツが上手くできず楽しめない苦労につながる一方で、手汗をかきやすいことがスポーツで有利にはたらき優越感につながる場合もあった。3つ目は触れた手に汗がついた経験だ。触れた相手の手に自分の汗がつくと、相手の気持ちや反応が気になり、恥ずかしさや不安を感じることから、手に多くの汗をかくことが、「親密な関係を回避せざるをえない」（西倉 2008: 46）辛さにつながるがあった。4つ目は誰かと一緒にいる時に気になる手汗だ。誰かと一緒にいる時には、手汗をかいていることへの恥ずかしさ、申し訳なさ、相手に不快な思いをさせていないかという不安をより感じることで示唆された。〈世間は汗に対して気持ち悪い・汚い印象を持っている〉と感じ、手汗への否定的な感情を抱く人もいた。汗をかくこと自体の居心地の悪さに焦点を当てて語る人もいた一方で、自分だけが汗をかいている状況は嫌だが、周りの人もかいている状況であれば気にならないと、自分だけが汗をかく状況の嫌さに焦点を当てて語る人もいた。

第2節では、手に多くの汗をかきやすいことを人に隠したいと思う理由として、世間的な手汗へのイメージが悪いこと、手汗が〈ばれて〉傷ついた経験があることが示唆された。人と距離を取り、手汗を隠す癖がついていた人もいた。手汗を伝える時としては、親密な関係にある人に対して〈自分の心にある深刻な悩みとして手汗を打ち明け〉信頼関係が築かれた場合や、手が触れそうな相手に対して〈相手に手汗がついてしまうことを前置きとして伝える〉場合があったと考えた。家族との関係性においては、親に謝られた経験や、家族から手汗をかきやすいことが悩みだと思われなかった経験、治療を勧められるようになった経験が語られた。

第3節では、治療に対する考えをまとめ、多量な手汗の医療化について考察した。多量

な手汗の医療化が当事者にとっての希望につながるため、治療をしたいと思う人もいる一方で、多量な手汗に悩み治療についての情報を知っていたとしても、医療機関を受診しない選択をする人もおり、医療による治療だけが悩む当事者を救うとする見方や、病院への受診率の低さを問題視することには慎重になるべきだと考えた。また、薬や治療の効果を感じられなかった経験が、当事者に手汗の程度の重さを実感させること、「普通」になるためにお金を払い治療することに対して虚しさを感じる場合があること、手にかく汗と脚や背中にかく汗の違いをどう考えているかが代償性発汗に対する認識の違いに影響すること、が分かった。

第4節では、手汗への感じ方が時期によって、また人によって異なる要因には、発汗量の違い、汗をかく機会の違い、関心事の違い〔他の病気の影響など〕、周囲の人々の反応の違い〔いじられる環境・過度に驚かれずいじめられない環境〕、自分と同じ頻度・量の汗をかく当事者がいたかどうか、が挙げられた。手に多くの汗をかくことが悩みになるかどうかは、単純に量や頻度だけで決まるのではなく、環境や状況、それぞれの関心ごとによっても変化すると考えた。

以上から、〈手に多くの汗をかきやすいことは、当事者の生活や価値観にどのような影響を与えるのか〉に対しては、〈自分の意図に反して手のひらに多くの汗をかいてしまうという身体的特徴は、日常生活の至る所で支障としてあらわれ、そのたびに当事者の感情を揺さぶる〉、〈多量な手汗を隠すために人と距離を取る癖がつくことや、手汗を伝えたことによって新たに信頼関係が作られることがある〉、〈手に多くの汗をかくことが悩みになるかどうかは、単純に量や頻度だけで決まるのではなく、環境や状況、それぞれの関心ごとによっても変化する〉と答えられる。また〈多量な手汗の治療に関する経験は、当事者にどのような影響を与えるのか〉に対しては、〈治療をしたいと思う人もいるが、多量な手汗に悩み治療についての情報を知っていたとしても医療機関を受診しない選択をする人もいること〉、〈薬や治療の効果を感じられなかった経験が、当事者に手汗の程度の重さを実感させる〉と答えられる。加えて多量な手汗の医療化については、医療による治療だけが悩む当事者を救うとする見方や、病院への受診率の低さを問題視することには慎重になるべきだという指摘もした。最後に、〈現代社会において、多量な手汗やその他の身体部位からの発汗にはどのような意味が付与されているのか〉に対しては、〈汗をかきやすい当事者にとって、世間は汗に対して気持ち悪い・汚いといったマイナスな印象を持っていると感じられる〉、〈人が汗をかいていないのに自分だけが汗をかいている状況において、

本来は生理現象である汗が、本人にとって耐えられず対処したいと思うものに変化する」と答えられる。

本稿の限界として、アンケート調査では回答者の少なさと属性の偏り、性別と年齢を聞く質問が無かったことが挙げられる。インタビュー調査では調査協力者が5人と十分ではなかったことが挙げられる。また、社会や環境の変化によっても手汗による支障が軽減できる可能性や、現代社会における発汗の位置づけについての考察には、さらに多くの当事者へのインタビューや、当事者ではない人々への意識調査が必要だと考えられるため、今後の課題としたい。

注

- (1) 厚生労働科学研究費補助金 疾病・障害対策研究分野 難治性疾患克服研究, 2009, 「特発性局所多汗症の疫学調査、脳血流シンチの解析による病態解析及び治療指針の確立 平成21年度 総括・分担研究報告書」, 代表: 横関博雄
(<https://mhlw-grants.niph.go.jp/project/17112>) 2023.1.10 閲覧.
- (2) 『kiitos.』は、株式会社三栄の雑誌。公式Instagram (kiitos.__magazine) によると『kiitos.』は「自分らしく、外見だけでなく内側からも健康的かつ魅力的でいたいと願う大人の女性のためのヘルシー&ビューティマガジン」とされており、3、40代の女性をターゲットとしていると考えられる。
- (3) PRTIMES, 2021, 「夏は“汗”できれいになれる絶好のシーズン! 『kiitos.』 vol.20 の特集テーマは『いい汗、かいてこう!』」(株式会社 三栄)
(<https://prt-times.jp/main/html/rd/p/000000545.000023526.html>) 2023.1.30 閲覧.
- (4) 花王株式会社ホームページ, 「消費者実態調査 現代人の汗事情」
(<https://www.kao.co.jp/8x4/lab/survey02/>) 2023.10.23 閲覧.
- (5) 前掲(4).
- (6) 日本テレビ報道局公式 YouTube チャンネル「日テレ NEWS」, 2023.8.8 放送「news every.」, 「【手掌多汗症】タオル手放せない... 手に”多量の汗”17歳高校生の日常と思いたい」(<https://youtu.be/5Dr3zjS67Uc?si=5WbZsG60TinxhRC9>) 2023.11.22 閲覧.

- (7) 前掲(6).
- (8) Stanford University School of Medicine, Adjunct clinical professor, Medicine - Primary care and Population health
- (9) 前掲(1).
- (10) hyperhidrosis disease severity scale の略。アメリカ皮膚科学会の医学雑誌で紹介された。
- (11) 手足の多汗症のうち、原因不明で常時耐えがたい苦痛を感じている患者。
- (12) 前掲(1).
- (13) 前掲(1).
- (14) 多汗症患者であるかは、hyperhidrosis disease severity scale を用いて、回答者の自己評価により判断した。
- (15) 前掲(1).
- (16) 前掲(6).
- (17) ETS 実施のためのインフォームドコンセント実施に関する記載は、2010 年に作成された原発性局所多汗症診療ガイドラインから見られる。改定後も記載されている。
- (18) 1997 年から 1999 年までの間に昭和大学病院で ETS を施行した手掌多汗症 19 例に対してアンケートを依頼。男性 9 名、女性 10 名。年齢は 15 歳から 32 歳で平均 23 歳。回答を得た 15 例を検討した。
- (19) インターネットアンケート調査会社が有する調査パネルに登録された全国の男女 707,358 人のうち、腋窩の多汗症状の hyperhidrosis disease severity scale が 3 以上かつ Hornberger の診断基準に 2 項目以上該当する調査対象者を抽出した。
- (20) 6 人組の YouTuber グループ「東海オンエア」のリーダーとして活動しているてつやは動画内で手に汗をかきやすいことをよくいじられていた。
- (21) 躁うつ病〔双極性障害〕。機能を妨げるほどの重度または持続的な悲しみと興味または喜びの減退が見られる状態。
- (22) 副作用の内容から、抗コリン薬の内服だと考えられる。
- (23) ふたえまぶたを作成する埋没法は、医療用の糸を上まぶたの内部に通す手術だ。
- (24) 手足の指や手のひら、足の裏などにできる小さな水ぶくれ。
- (25) 自律神経の働きが悪くなる病気として、起立性調節障害が挙げられ、この病名が付いた可能性がある。

- (26) 一日中気分が落ち込んでいるといった精神症状、眠れない、食欲がない、疲れやすいなどの身体症状が現れる。
- (27) 前掲(6).
- (28) 筆者は資格試験で無地のハンカチの持ち込みを禁止された経験がある。

謝辞

本調査を完遂できたのは、インタビュー調査にご協力いただいた5人の皆様のおかげです。心より御礼申し上げます。

本稿執筆にあたりご指導いただいた柘植あづみ先生とゼミ生の皆様、3年次の実習で質的調査の手法をご指導いただいた渡部沙織先生に心より感謝申し上げます。

参考文献

- David R. Strutton, Jonathan W. Kowalski, Dee Anna Glaser and Paul E. Stang, 2004, "US prevalence of hyperhidrosis and impact on individuals with axillary hyperhidrosis: Results from a national survey," *Journal of the American Academy of Dermatology* 51, pp.241-248.
- 藤本智子・大勝寛通・深山浩・大嶋雄一郎, 2022, 「腋窩多汗症の患者意識調査：インターネットアンケート調査 608 人の結果報告」『日臨皮会誌』39(3), pp.431-439.
- Fujimoto T, Inose Y, Nakamura H, Kikukawa Y., "Questionnaire-based epidemiological survey of primary focal hyperhidrosis and survey on current medical management of primary axillary hyperhidrosis in Japan," *Arch Dermatol Res*, 2022, doi: 10.1007/s00403-022-02365-9, Online ahead of print.
(<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/35768620/>) 2023.11.23 閲覧.
- 藤本智子・横関博雄・片山一朗・金田眞理・室田浩之・田村直俊・菅野範英・吉岡洋・玉

- 田康彦・四宮滋子・岩瀬敏・犬飼洋子，2015，「原発性局所多汗症診療ガイドライン 2015年改訂版」『日本皮膚科学会雑誌』125(7)，pp.1379-1400
(https://www.jstage.jst.go.jp/article/dermatol/125/7/125_1379/article/-char/ja/)
2023.1.10 閲覧.
- 藤本智子・横関博雄・中里良彦・室田浩之・村山直也・大嶋雄一郎・吉岡洋・宗次太吉・羽白誠，2023，「原発性局所多汗症診療ガイドライン 2023年改訂版」『日本皮膚科学会雑誌』133(2)，pp.157-188.
- ゴッフマン,E., 2016，『スティグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ』（石黒毅訳）せりか書房。（Erving GOFFMAN, 1963, *STIGMA: Note on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall, Inc.）
- 本間洗貴，2019，「難病『原発性局所多汗症』の認知を広める映像を制作したい！」
(<https://readyfor.jp/projects/Hyperhidrosis>) 2021.11.7 閲覧.
- 石井政之，2000，「『異形の人』をとりまく現状—日本と海外の比較」『看護学雑誌』64(5)，pp.402-406.
- イヴァン・イリッチ，1979，『脱病院化社会 医療の限界』（金子嗣郎訳）株式会社晶文社。（Ivan Illich, 1976, *LIMITS TO MEDICINE MEDICAL NEMESIS: The expropriation of health*, London: Boyars.）
- 村野恵美・石毛美代子，2005，「成因と症状」小泉武夫編『改訂新版 痙攣性発声障害』時空出版，pp.6-16.
- 西倉実季，2008，「異形の人々の対処戦略—顔にあざのある女性のライフストーリーから」『年報社会学論集』2008(21)，pp.37-48.
- 野島那津子，2021，『診断の社会学—「論争中の病」を患うということ』慶應義塾大学出版会.
- 野中誠・門倉光隆・片岡大輔・山本滋・川田忠典・高場利博・増田豊，2000，「術後アンケートによる手掌多汗症手術症例の検討」『昭和医学会雑誌』60(6)，pp.687-691.
- 野津原広中「完治困難な『多汗症』…患者の苦悩 症状の深刻さ知られず」『西日本新聞』（2020.6.1）(<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/611059/>) 2023.1.10 閲覧.
- 小野善郎，2022，『思春期の心と社会 メンタルヘルス時代の思春期を救え』福村出版株式会社.
- P.コンラッド・J.W.シュナイダー，2003，『逸脱と医療化:悪から病いへ』（進藤雄三監

訳, 杉田聡・近藤正英訳) ミネルヴァ書房. (Conrad, P. & Schneider, J.W., 1992, *Deviance and Medicalization*, Temple University.)

田中岐佳, 2022, 「女性は出産するのが当然という『呪縛』とどう向き合うか—ロキタンスキー症候群の当事者の語りから」『2021年度柘植ゼミ卒業論文集』 pp.1-61, 明治学院大学社会学部社会学科柘植ゼミ発行.

Zola, I.K., 1975, “In the name of health and illness: on some socio-political consequences of medical influence,” *Social Science and Medicine*, 9, pp.83-87.

巻末資料 1 アンケート内容 [Google フォーム]

Sec 1

明治学院大学4年の高松あやめと申します。ご協力ありがとうございます。

- 1.私は「手に汗をかくこと」をテーマとした卒業論文を執筆しております。
- 2.このアンケートは、論文執筆の為のインタビューに協力していただける方を探す目的で行っていますが、回答の集計結果を論文で用いる可能性があります。
- 3.アンケートは匿名です。※インタビューに協力していただける方には、お名前とご連絡先をご記入いただきます。

■質問 1

あなたは、「自分は手のひらに汗をかきやすい」と思ったことがありますか。

【はい】

【いいえ】 (→質問4へ進んでください)

【わからない】 (→質問4へ進んでください)

Sec 2

■質問 2 ※質問 1 で【はい】を選んだ方のみ、ご回答ください

- ・手汗の程度について、以下の質問にご回答ください。
- ・現在症状が無い方は、症状があった頃のことについて教えてください。

(1) 手汗によって、日常生活に支障はありますか。

【1】 全く支障がない 【2】 時々支障がある

【3】 頻繁に支障がある 【4】 常に支障がある

(2) 手以外にも汗をかきやすい部分がありますか。

【はい】 (→よろしければその部分を教えてください：) 【いいえ】

(3) 手汗の症状で、医療機関を受診したことはありますか。

【はい】 【いいえ】

(4) 手汗の原因は判明していますか。(他疾患の合併症としての発汗など)

【1】 原因が判明している (→その原因を教えてください：)

【2】 原因不明である

Sec 3

■質問3 ※質問1で【はい】を選んだ方のみ、ご回答ください

私は卒業論文執筆のために、「手汗のご経験がある方」または「手汗の治療のご経験がある方」を対象としたインタビュー調査を行っています。

- ・内容：手汗を意識する瞬間や、治療の経験などについて
- ・時間：1時間程度
- ・場所：オンラインまたは対面

(1) インタビュー調査に協力していただけますか。

【協力する】 【迷っている】 【協力しない】

(2) (1)で【協力する】または【迷っている】を選択した方のみ、ご回答ください
あなたのお名前とご連絡先（メールアドレス）をご記入ください。

※ご記入いただいたアドレスに、調査の概要（方法・目的・質問内容）を説明した依頼状を送付いたします。そちらをもとに、協力するかどうかをご検討いただければ幸いです。

Sec 4

■質問4 ※質問1で【わからない】【いいえ】を選んだ方のみ、ご回答ください

手のひらに多くの汗をかく人がいることを知っていますか

【はい】（→そのきっかけは何ですか：）

【いいえ】

Sec 5

■おわりに

- 1.質問は以上です。ご協力いただきありがとうございました。一人でも多くの方にご回答いただきたいので、この調査フォームを身近な方に紹介していただけると嬉しいです。
- 2.送信ボタンを押して回答を終了させてください。

調査者 明治学院大学社会学部社会学科 高松あやめ

巻末資料 2 「手汗に関するアンケート」単純集計結果

調査名：手汗に関するアンケート

目的：1. 手に汗をかきやすい人々の存在と意識を探る

2. 手汗をかきやすいと感じたことのある人を見つけてインタビュー協力依頼をする

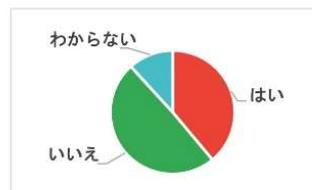
調査期間：2023年6月21日～2023年7月1日

実施者：高松あやめ

回答数：77

■質問 1 あなたは、「自分は手のひらに汗をかきやすい」と思ったことがありますか。

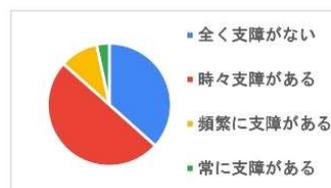
	度数	割合
はい	30	39.0
いいえ→質問 4 へ	38	49.4
わからない→質問 4 へ	9	11.7
合計	77	100.0



■質問 2 ※質問 1 で「はい」を選んだ方のみ回答

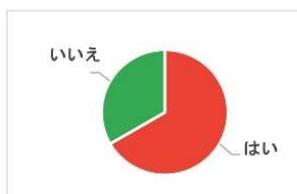
[1] 手汗によって、日常生活に支障はありますか。

	度数	割合
全く支障がない	11	36.7
時々支障がある	15	50.0
頻繁に支障がある	3	10.0
常に支障がある	1	3.3
合計(質問 1 で「はい」を選択)	30	100.0



[2] 手以外にも汗をかきやすい部分はありますか。

	度数	割合
はい	20	66.7
いいえ→[4] へ	10	33.3
合計(質問 1 で「はい」を選択)	30	100.0

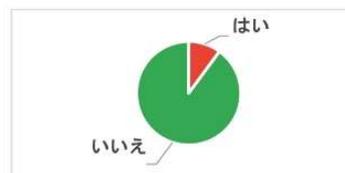


[3] [2]で【はい】と答えた方にお聞きします。よろしければその部分を教えてください。
※自由記述（複数回答有）

	度数	割合
頭	1	5.9
顔・額・鼻・口周り	5	29.4
首	1	5.9
ワキ	4	23.5
背中	1	5.9
裏もも	1	5.9
足・足の裏	6	35.3
全身	2	11.8
合計	17	100.0

[4] 手汗の症状で、医療機関を受診したことはありますか。

	度数	割合
はい	3	10
いいえ	27	90
合計(質問1で「はい」を選択)	30	100.0



※受診経験のある3名のうち、手汗によって頻繁に支障がある2名・時々支障がある1名

[5] 手汗の原因は判明していますか。(他疾患の合併症としての発汗など)

	度数	割合
原因が判明している	2	6.7
原因不明である→質問3へ	28	93.3
合計(質問1で「はい」を選択)	30	100.0



※原因が判明していると答えた2名のうち、医療機関を受診した経験があるのは1名

[6] [5]で【原因が判明している】と答えた方にお聞きします。
よろしければその原因を教えてください。
※自由記述(複数回答有)

	度数	割合
緊張	2	100.0
ストレス	1	50.0
自律神経の失調	1	50.0
合計([5]で「原因が判明している」を選択)	2	100.0

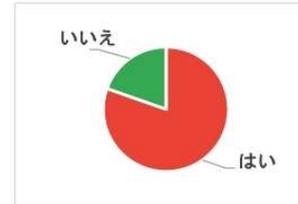
■質問3 ※個人情報のため、結果は省略

- [1] インタビュー調査に協力していただけませんか。
【協力する・迷っている・協力しない】
- [2] [1]で【協力する】または【迷っている】を選択した方のみ、ご回答ください。
あなたのお名前とご連絡先(メールアドレス)をご記入ください。

■質問4 ※質問1で「分からない」「いいえ」を選んだ方のみ回答

[1] 手のひらに多くの汗をかく人がいることを知っていますか。

	度数	割合
はい	37	80.4
いいえ	9	19.6
合計	46	100.0



[2] 【はい】と答えた方にお聞きします。そのきっかけは何ですか。

※自由記述

	度数	割合
友人や恋人が当事者	17	48.6
YouTube	7	20.0
このうち、東海オンエアでつやさんの名前を挙げた方	3	-
メディア・TV・Webサイト	5	14.3
当事者と手が触れた	2	5.7
多汗症という言葉聞いた	1	2.9
Instagram	1	2.9
Twitter	1	2.9
漫画	1	2.9
合計	35	100.0

巻末資料3 インタビュー質問票（半構造化インタビュー）

1 手汗が気になりだした時期やきっかけ、具体的な症状について教えてください。
手汗が気になりだした時期から現在にかけて、手汗を意識した経験について自由にお話しください。

以下の内容が話されたか確認して、話されていないければ確認の質問をする

- ・手汗が気になりだした時期はいつですか
そのきっかけはどんなことでしたか
- ・具体的な症状について教えてください
ご自身は、ご自分の症状が重いのか、軽いのかについてどう思いますか／いましたか
- ・手汗を意識するのはどんな時でしたか（一人である時／他人と一緒にいる時）
就学や就労において手汗を意識したことはありますか
- ・症状についてどう感じていましたか（不便だ、困る、嫌だ、と思いますか／ましたか）
それはなぜでしょうか
- ・手汗の症状が出た時、または出る前に、どんなことをしていましたか
- ・手汗の症状や、手汗への対処方法についての情報を得たいと思ったことはありますか
それはなぜでしょうか
どんなことを知っていますか
その情報はどこから得ましたか

2 手汗のある生活や、手汗をかく自分自身のことをどう思っていますか／いましたか。

- ・症状が周りの人に知られた、認識された、明らかになったのはどんな時でしたか
周囲はどんな反応をしましたか ご自身はどんな気持ちになりましたか
- ・症状について自分から周りの人に打ち明けようとしたことはありますか
いつ 誰に どのように なぜ
周囲はどんな反応をしましたか ご自身はどんな気持ちになりましたか
意識的に伝えなかった人はいますか 隠そうとしたことはありますか
- ・手汗をかくことが影響して、何かをためらった経験（実行するかどうか迷った経験）は

ありますか

- ・手汗をかくことが影響して、やりたかったことを諦めた経験はありますか
その時どう感じられていましたか
- ・手汗をかくことや、手汗をかく自分自身のことをどう思っていますか
（「手汗をかく自分」と認識していない場合は省略）
- ・人生の中で手汗に関してのお考えに変化はありましたか それはなぜでしょうか
- ・「多汗症」「手掌多汗症」という言葉を知っていますか、知ったのはいつ頃でそのきっかけは何ですか

3 (1) 手汗の症状により医療機関を受診したご経験のある方
受診するまでの経緯と受診時の経験について教えてください。
複数ある場合は初めての受診から順番にお話してください。

- ・初めて（2回目・3回目…）病院を受診したのはいつ頃（何歳頃）ですか
そのきっかけは何ですか
受診した理由や目的について教えてください
なぜその医療機関を選んだのですか（どこの国の医療機関か）
受診の前に誰かに相談しましたか おひとりで受診されましたか
- ・診察の際にはどのようなご経験をされましたか
（医者や同行者との会話で印象に残っていること）
- ・病院への受診や治療の際にどんなことを思っていましたか（受診前後・治療前後）
- ・治療を選択されましたか
「はい」→今までの治療の内容、実施時期について教えてください
なぜ治療を選択したのですか
治療方法はどのようにして選択しましたか
効果は感じましたか
副作用や後遺症はどれくらいありましたか
経済的な負担はどれくらいありましたか 受診や治療費用の負担者は誰でしたか
→治療をやめた場合、なぜやめたのですか

現在の治療状況について教えてください

「いいえ」→なぜ治療を選択しなかったのでしょうか

今後したいと思えますか（「はい」→3(2)二つ目の「・」の質問も尋ねる）

- ・受診したことを誰かに話しましたか
- ・今までの受診経験の感想や、医師・医療機関への感想を教えてください
(治療の際の気持ち よかったこととよくなかったこと 満足度 勧めたいかどうか)

3 (2) 手汗の症状により医療機関を受診したご経験のない方

手汗の治療について知っている情報はありますか。

また、病院を受診したい（治療したい）と思ったことはありますか。

- ・手汗の治療について知っている情報はありますか

どんなことを知っていますか

その情報はどこから得ましたか

- ・手汗の治療をしたいと思ったことはありますか

「はい」→どんな時に思いましたか そのきっかけ

病院に行く予定はありますか なぜでしょうか

どうやって病院を選びますか

「いいえ」→なぜでしょうか

治療した人をどう思いますか

4 基本情報

性別 年齢

職業 学部

国籍 出身地 居住地

定位家族の構成（生まれ育った環境の家族） 両親の職業

配偶者の有無 生殖家族（結婚などによって築いた新たな代の家族）

どのような環境で育ったか

学歴 引っ越し・転校の経験